〔研究ノート〕

アメリカにおける家事労働の歴史文献をたどる
～大衆消費の歴史と併せて(2)

森　　杲

3．「独立革命」～建国期の家庭と家事労働の変容

(1)　メアリー・ベス・ノートン；革命がもたらした女性の役割変化

i）独立運動前の女性

ノートンの著作 Liberty's Daughters[1] の画期性については，これまでも何度か触れてきた。植民地社会で時代を下るほど家事労働への評価が低下したということから，次に，それに続く独立戦争を機に一転して女性の社会的役割に評価が高まったとする女性史の筋立ては，ノートンの業績を筆頭にしていまや定説となっているとさえいえよう。このノートンの著作は2部から構成され，第1部が主として植民地時代の最終段階における家庭生活の諸側面を吟味し，第2部が独立革命の過程をつうじて女性がどのような変化に遭遇しそうして女性の役割も意識も変わっていったかを主題にしている。前段第1部における日常生活の記述は，本稿でノートン以降の研究をふくめてのべてきた内容と重なる点が多いので，ここでは第1部全般にわたる論旨ではなく，第2部の独立運動の成行きに伴う変化につなげるのに必要な――本稿のこれまでの論調と力点がやや違うと思われる――3点を加えるにとどめる。

第1に，女性労働――とりわけ農村部での仕事――の中における，木綿，麻・亜麻，羊毛等を原料とした糸紡ぎと機織りの重要性が強調される。[2] これは18世紀後半に，家庭向けの機織り道具が農村部から急速に普及してきたことの結果であろう。とくに12月ころから初春にかけての農村女性（母親も娘も）の仕事のうちで，糸紡ぎと機織りは最も長時間を要するものになった。機織り機はやがて，独立革命前夜のイギリス商品ボイコット運動にも後押しされて都市部に普及し，女性労働全体のシンボルとされるまでになっていく。[3] この仕事の普及は，家事労働のなかで質的にも特別の意義を持っていた。それは主婦ばかりでなく娘が結婚前に身につけるべき女固有の仕事となり，母から娘に継承される明確な技能として受け取られた。それは，19世紀に入って農村の娘たちが新設の紡績工場に続々吸収されていく，前提といえるかもしれない。もう一つの重要な意義は，この家内労働が母と娘二人きりでなく，しばしば隣近所集まっての集団で行われ，技能を交流し，ときには数日間の仕事のあとダンスをもってしめるといった，女性のコミュニティをつくったことである。一人でやれば単調できついばかりの機織りの仕事も，こうして女たちに交流と喜びの時間を提供した。しかもそれは，家事労働のなかで最も市場経済との近接性をもって実感される労働であった。このことは，既述のノートンの別書で17世紀の女性コミュニティが，何より

1）Mary Beth Norton, *Liberty's Daughters: The Revolutionary Experience of American Women, 1750-1800*, 1980.

2）ibid., pp.14-20.

3）ibid., pp.18-19. ベンジャミン・フランクリンが妹ジェーンの結婚にさいして，「よい主婦の条件には，ただの可愛い淑女であるよりずっと望まれることがある」と言って紡ぎ車を祝いに贈ったことが，時代の象徴的なエピソードとして今日よく引用される。

出産時の産室に見られていたのと較べても大きな意味があるだろう。

第2に,(これはすでに本稿でも関説したところであるが) 植民地で結婚した女性にはイギリス本国よりやや良い権利が保証された面もあるとはいえ，そのような権利を自覚しかつ実行に移した女性は，きわめて僅かでしかなかった。離婚についても同様だった。したがって女にとって良い男にめぐり合うかどうかが，一生の幸と不幸を分かつ要因となる。そこから夫の選択の間違いを防ごうとする二つの社会的メカニズムが発展した。一つは適齢期の女性向けの社会的に厳格な行動ルール —— 純潔の強調，男女交際の制約等 —— を強化していった方向であり，もう一つは結婚の決定に親がかかわる重さが増したことである。とくに後者についてノートンは，結婚にさいしての親子関係にかんするこれまでの研究が，総じて父親が息子の嫁を品定めする面 —— この面では息子の主体性はかなりよく保証された —— に偏していたと批判し，ここではむしろ娘の結婚相手に親がかかわった程度や質の問題の方に立ち入っている。その結果見られた特徴として，18世紀植民地の親たちは娘の結婚相手選びを親の「責任」と受けとめて介入する傾向があり（この点，本稿前章のナンシー・コットによる離婚訴訟分析での解釈とニュアンスが異なる)，同時に，むしろ娘の方から親に意見を求め親の助言を尊重する風潮もあったことが述べられている。さらにそのさい，父親が娘の配偶者の財産にこだわりがちだったのにたいして，母親はむしろ相手を経済条件第一で選ぶことに反対した。そうした結婚観は父から息子に，母から娘にも引き継がれて,「結婚は何より愛情」という価値観が女の世界のものとして広がっていく。むろん母や娘の望みがかなって良い配偶者にめぐり合ったとしても，その結婚が女性に束縛と従順を強いるものであること，彼女の幸せは夫をどれだけ満足させ続けるかにかかっていることは，変わるところがなかったけれども。[4)]

第3に，子育てにおける母親の意識と役割の問題である。これは独立後の家事労働への高い評価づけの核心につながる部分であるから，少し詳しく内容を見ておこう。ここでのノートンの論調が，前章でナンシー・コットの離婚訴訟分析で指摘された第4点 —— 両親が離婚にあたって子どもの存在に冷淡である —— と，かなり違う母子像を描いていることにも留意したい。

多くの妻は愛する夫からと同じく，子どもたちから大きな喜びを与えられた。子どもを慈しむ母親の情感は当時の日記や手紙に満ちており，それは他の家事労働にかんしての書きぶりと対照的でさえある。しかし彼女たちの母親としての喜びはわが子をしっかり確保するまでの幾多の難関 —— 流産，死産，乳児死亡，母体の生命の危険 —— を乗り切って始めて味わえるものだったから，彼女たちは一方で妊娠＝出産をとても恐れてもいた。生まれたばかりの赤子は，母親にとってまだ自分の子として認識されない。18世紀の両親は，そのような子を一個の人格として受け入れず，赤ん坊を妊娠中の胎児と同じく男も女も区別せずに〝it〟と呼び，洗礼を受けたあとさえ名前でなく「ベイビー」とか「チャイルド」と呼ぶのが普通だった。赤ん坊にはすでに死んだ兄弟の名前，親や祖父母の名前がよくつけられ，その子を独自の存在としてより家族成員の継続性のなかに位置づけようとした。これを別の面からいうと，生まれてすぐ死んだ —— 人格の形成にいたらず「神に召された」—— 子にたいして，両親はわりに平静に受け入れる心境と習慣が社会的に存在した。[5)]

だが生まれて数ヶ月後から赤ん坊の反応や自意識が感じられるようになるにつれて，親も子の名前や性を意識し始める。とくに，植民地の母親たちが急速にその子にたいする情感を高めていったのには，ヨーロッパのように乳母を雇う習慣が富裕な家族にさえなく，自分の乳を与え自分の手で子育てにかかわったことが大きな意味を持つとノートンは考える。だが赤ん坊が

4）Norton, op. cit., pp.51-60, p.96.

5）ibid., p.71, pp.85-88.

1歳を過ぎたころに母親が次の妊娠をするといった一般的事情からも，離乳をさせる時期は早く，授乳期はせいぜい1年くらいのものだった。1歳の子の離乳をどうやって行うかを教える標準的な指導書のごときは存在しないが，隣近所の女たちが若くて経験の浅い母親を励ましてそれは実行された。[6]

子どもがよちよち歩きと片言の話をし始めるにつれて，両親の喜びはいや増す。だが父親がただそれを喜んだのと違って，母親は子どもの相手で「疲れて死にそう」とか「子どもの要求に頭が痛い」とか，表白するようになる。かくして男の子も女の子も幼児期には，実質的に大きな権限が母親のもとにあった。だが子どもがさらに成長すると，たてまえとして父親の権威が押し出されてくる。18世紀のアメリカで入手できた育児書――多くがイギリスで書かれた――には，父親の育児権ばかりが強調されて，マターナルな側面に直接の言及がほとんどない。母親の役割にかんする記述がたまにあると，それは子どもを甘やかしてはいけないといった論調のものである。だがそうしたたてまえと別に，18世紀後半のアメリカで，母親も子どものしつけに関与したし，子育てにおける自分の大事な役割（「グレート・タスク」）を自覚し，それを喜びとしていた。[7]

さらに子が成人期に近づくにつれて，子どもの道徳や行動を律する父親の権威と義務（パターナリズム）が，個々の家庭内事情を越えて社会的に要請される。父親の権威は息子にも娘にも及ぶが，総じて息子が父親の関心領域に取り込まれる傾向が強い。それにたいして母親は次第に娘に関心を集中していった。そして父が子に情実を排し距離を置いた権力的な関係を志向したのと対照的に，母は娘と「ベスト・フレンド」とさえ表明したような，親密な仲間関係を築く傾向があった。[8]

子どもが育つにつれて，今度は息子と娘がそれぞれに家計の中での義務を課せられていく。彼らが成人に達すると親の子にたいする扶養義務は終わるが，次にその親が年老いて働けなくなったとき，子どもが親の面倒を見る義務は親の死まで終わることがない。息子は金銭的に親を援助することで直接面倒を見る義務を免れることができたが，娘のほうはそれを免れえないものとされた。したがって家庭のなかに女の子が誕生した時点から，その子はやがて両親の面倒をみるものとして祝福された。[9]

ii）独立運動を契機として起こった状況と女性自身の変化

ここからノートンの著作の第2部に入る。まず第2部前半の主題は，印紙条例撤廃運動（1765-66年），ボストン茶事件（1773年），大陸会議（1774年），英米武力衝突（1775年），独立宣言（1776年），パリ条約＝英国による合衆国独立の承認（1783年）といった諸事件に代表される独立運動のほぼ20年の経緯を通じて，家庭生活に具体的にどんな変化が生じ，その中で女性がどんな役割を果たし，女性の仕事にかんする社会的評価と女性自身の意識がどのように変わったか，ということである。ここではそれを，ほぼ事態の展開に沿って3点に要約する。

① 1760年代以降，イギリス本国の植民地政策に反対する公然のデモを繰り返し，議会法撤廃を勝ちとった祝賀の集会をもち，王党派に属する植民地住民を近隣から追い立て，また暴徒の出没によって脅かされる地域の生活を自衛すべく取り組んだ過程で，不可避的に女性は，これまで夫，父，息子しかかかわらなかった公的な領域に引きずりこまれた。とりわけ重要な契機を提供したのが，植民地リーダーが闘争手段としてイギリス商品への不買運動を呼びかけ，家内における女性の役割に突然，政治的な意味を付与したことである。イギリス製品ボイコット闘争の成功の度合いは，家庭の主婦と娘がどれだけ輸入品を買うのを止めるか，そして自らの家内生産に切り替えるかにかかっていると，彼らは説いた。それは白人女性の仕事にとどま

6）ibid., pp.90-92.
7）ibid., pp.93-96, p.101.
8）ibid., pp.102-103.
9）ibid., p.97.

らず，女性の奴隷が行う労働内容の変更にまで向けられた。

イギリス製品不買の最初の標的は茶であった。新聞が，茶を飲むのをやめた女性たちを讃える記事を繰り返して掲載した。「主婦によって買われる茶はあなたの息子の血をもって購われる」，女性の飲茶拒絶はイギリスにたいして「アメリカの愛国心が女性（フェア・セックス）にまで広がり，われらを隷属させようといういかなる試みをも打ち砕く」といった具合である。こうした記事が果たした効用は，そのボイコットが実際イギリスにどれだけ痛手を与えたかよりはるかに，社会的事象にたいする女たちの関心と関与を鼓舞した点に見られなければならない。茶を買わない，飲まないことを誓う女性の集会が各地に生まれ，自分たちが住む地域の議会とその財産のために奉仕するのは私たちの「義務」だと唱える誓約も書かれた。[10)]

女性の社会意識のこうした高揚に対応して，男性の意識もすぐそれを受け入れる方向で変わったわけではない。植民地リーダーは茶に続いて，イギリス製の布地を買わず自家生産することを呼びかけたが，それは女性の役割の見直しというより，糸紡ぎと機織りこそ女本来の職分だからという論拠を伴ってのことであった。こうした呼びかけにたいして，輸入布製品に大きく依存してきた南部植民地での反応は最初鈍かったが，南部の男たちは次第に，麻や亜麻の作付けを増やし女奴隷の仕事を紡績に振り向けるのが経済的に引き合うことを知って，1780年代にはすでに転換が大きく進んでいた。一方，北部植民地では，リーダーは自家生産の意義をもっと直接に主婦や娘たちに向けて説かなければならなかった。「結局のところ，われわれの経済を導入しようという努力には，大きく女性の手を借りなければならない」，「アメリカン・レディの勤労と節約は，世界という視野のなかでその性格を褒め称えなければならず，彼女たちがアメリカ大陸全体の救出にいかに大きな寄与をなしているかを示すのに役立てなければならない」。紡織作業を一緒に行う集まりや，手製の衣服をまとった女たちの愛国の集会が各所で開かれた。[11)]

② 次の段階は，独立宣言以降，植民地の女性がもっと直接に政治と戦争にかかわっていった過程である。女たちは新聞やパンフレットを熱心に読み，夫や父に繰り返し事態の推移とその意味にかんする質問をあびせかけ，見る間に政治と軍事の領域に通暁していった。集会において自分たちを「グレート・ポリティシャン」と呼んだ女性集団さえ出現した。結婚の相手選びにも，政治的な立場の相違が破談の要因となりえた。そうした関心と行動の高揚はけっして中産階級以上の女性に限ったことでなく，お針子たちが結束し，宿の女将が旅人に政治的な議論をふきかけ，捕虜のイギリス兵が女たちから罵声をあびせられるといった場景が各所で見られた。夫が出征した家庭，戦災を受けた家庭の生活維持にも，占領され英軍に強要された兵士の世話にも，主婦は中心的な役割を果たさなければならなかった。

こうした経緯を通じての女性の変わりようは，当初の個別的，散発的，当座的なものから次第に組織的，永続的なものへと進展する。印紙条例反対の結社「自由の息子」に対応して興った「自由の娘」（Daughters of Liberty）の活動は，最初10年余りは女性個々人の取組みがわずかに外延を広げるレベルにとどまっていたのが，1780年のイギリスの猛攻に立ち向かう中で，フィラデルフィアを発端に，歴史上始めて大規模かつ持続的な女性団体 Ladies Association の出現を見る。同年，フィラデルフィアの女性たちが，打ち続く敗戦で士気が低下した革命軍を鼓舞することを目指して，自分たちの虚飾を排しその資金を兵士のために用いようという募金活動を始めた。彼女たちは町を細かく区分して各々の担当区を決め，しらみつぶしに各

10) ibid., pp.155-161.

11) ibid., pp.164-170. 独立戦争下の女性の行動にかんして，Marilyn Yalom, *A History of the Wife*, 2001 林ゆう子訳『〈妻〉の歴史』2006年，202-206頁，および有賀夏紀の上掲書『アメリカ・フェミニズムの社会史』14-19頁が，かなりの紙幅を使って記述している。

戸をまわって醵金を訴えた。赤ん坊がいる女性が活動にでるときには誰かが無料で子守を引き受けた。この運動は全国に報道され，ペンシルヴェニアの他の町々，ニュージャージー，メリーランド，ヴァージニアへと伝播した。こうして集まった資金を具体的にどう使うかについての意見は当初一様でなかったが，ワシントン将軍の要請で兵士に新しいシャツを贈る方向にまとまっていく。かくして何千枚というシャツが，それを縫った女性のネーム入りで提供された。つまるところこの活動は多分に，伝統的な女性の家事労働がワシントンの意向を受け愛国的な行為に読み替えられたものであって，新しい女性の活動領域を創造したとはいえない。そしてこうした女性の懸命な自発的な活動にたいして，少なからぬ男性はこれを公然と否定しないまでも冷ややかな目で見，あるいは女性の言辞や行動の熱狂ぶりを揶揄する気風を変えなかった。[12]

③　独立の達成後，社会的事象全般にかんする女性の関心はさらなる高まりをみせる。女たちの街角でのおしゃべりの話題が新しく選ばれた大統領のことだったり，その大統領の就任演説の内容だったりした。革命後の女性たちはもはや政治を自分たちの領域外のこととは考えなかった。とはいいながら，その女性に政治的権限を付与するという発想の面では，議会も世論も，そして女性自身もけっして一挙に前進しなかった。第2代大統領ジョン・アダムスの夫人アビゲイルは当代きってのインテリ女性で政治的な識見も高く，外交官，行政官，大統領時代を通じて夫も常に彼女の意見に耳を傾けたといわれるが，その彼女のスタンスは，女性は大いに政治に関心をもち意見をのべるべきだが，それは公的な場所でなくあくまで私的に（たとえば夫に向けて）行われるべきだというものだった。そうでなく，因習を大胆に破るべきだと主張した女性ももちろん登場したが，アビゲイル夫人のような見解だけが多くの男から好意的に受容されたのである。したがって女性に公的な意見表明の権限――たとえば選挙権――を与えるべきだという発想はほとんど生まれも育ちもしなかった。[13]

12）Norton, ibid., pp.177-188.

iii）建国期共和主義イデオロギーが家庭と女性に及ぼしたインパクト

第2部の後段は，独立戦争が直接にもたらした変革ということを越えて，独立の達成から澎湃として起こった共和主義の思潮のなかで，家庭がどう変わり女性＝主婦の位置がどうなったかを主題とする。ノートンはその問題を，次のような総括的な展望を持って書き始める。

> 革命戦争後の時期は，アメリカの白人女性の生活に加速的な変化が生じた。彼女たちの戦時中の体験と発展してきた共和主義のイデオロギーとが結びついて，社会の女性観と女性の自己意識の両方を変えたのである。革命期の辛苦の中で家計をやりくりし家族を守りきった女性は，もはや弱さとかデリカシーとか能力の劣性とかいった女性にかんする通念を，自分の属性として認めなかった。さまざまの困難を自力で乗り切ってきた母親を見て育った娘たちは，早く結婚しなければという脅迫観念から脱し，ある者は一生結婚しないと決め，あるいは子どもの数を制限する道を選んだ。そしてこの国の未来を案ずる共和主義の理論家が，社会の徳性の源は女性にありとする昔からの常套句に新たな意味を付与した。彼らは，共和政体の存続如何は有徳の市民にかかっていると考えたから，1780年代と90年代のアメリカ人はいやがうえにも前例のない広がりをもって女性に関心を集めた。つまり戦争の結果として，アメリカでは男も女も，これまで疑ったことのない女性の本性と役割のネガティヴな特性なるものについて，再考し始めたのである。[14]

13）ibid., pp.188-194. この時期の唯一の例外として，1790年のニュージャージー選挙法が，有権者を"he or she"と記し，史上初めて女性選挙権を成文化した。だが女性は真に自分の意思と判断で投票行為ができないという反対論も当初から根強く，1807年の修正法によって女性と黒人は選挙権を剝奪された（ibid., pp. 191-193）。

14）ibid., p.228. ノートンはさらに，この文に次のよう

ここでもノートンの論旨を3点にまとめて記す。

① 第1点は，家庭内における成員の平等関係の進展である。共和主義的な夫婦生活観のコンセプトを一言でいえば「相互性 mutual」だった。「相互の尊敬，相互の親交，相互の信頼，相互の忍耐…」。1792年「レディーズ・マガジン」誌上に掲載された「夫婦間共和主義者」を自称する女性による論説は，「私は結婚生活において〝従う obey〟という用語に反対する。それは制限も定義もなしの曖昧語だからだ」と書き出す。そんな約束をすることで女は事実上，夫の奴隷になってきた。「男とその妻の間の服従関係は相互的なものだと私は考える。…結婚を優れた者と劣った者との契約だと考えてはならない。それは利益が共通する者の同盟であり，暗黙の利益のパートナーシップである。そこではあらゆる相違が夫婦の話し合いで調整され，決定の遡及力は認められない。」[15]

さすがにこれは当時としてはかなり突出した意見であったろうし，この同じ「レディーズ・マガジン」誌にも依然として男の優性と女の服従を説く論説が絶えなかったが，それにしても当時の家庭生活の実質において，成員間の平等の気風がかつての家長の絶対的権威を浸食していったことは疑いえない。ノートンが具体的にそれぞれ紙幅を使って例証しているのは，第1に，娘が結婚相手を選ぶのに親に依存せず自分の意思を最優先する，また親もあまり干渉しない，それが共和主義というものなのだとする考えが広がってきたこと，第2に，妻が育児労働のつらさや母体の健康上の理由をもとに子ども数を制限するのに，夫の同意と協力を求めるようになったこと，第3に，(既述のナンシー・コットの検証などで明らかになったように) 女性の側から提出された離婚訴訟が急増したこと，第4に，子どもにたいする親の養育義務の中に，単なる躾けでなく読み書きのような知識を身につけさせる義務が明示されるようになったこと，第5に，従来，女性が男性より劣るとされてきた事々がさまざまな場で吟味され――男の方の劣性や，女が犯す過ちを男も犯していることが暴露されて――法解釈で男女別々に科せられてきた「ダブル・スタンダード」(たとえば姦通の罰の差別) への挑戦が始まったこと，などである。[16]

② 第2点は，これまで公共の福祉と結びつけて考えられたことなどない「家事」という分野が突然，脚光を浴び，中でも子育てにおける母親の役割が家事の中心に据えられたことである。それは上述のように共和制の存続は有徳の市民の存在にかかっているとする教義を起点とし，そうした市民の徳性を育てるのは家庭であり，とりわけ母親であるとする脈絡から生まれた通念である。

男の徳性が女によって涵養される，女の堕落は男の堕落を生むといった言説そのものは，アメリカ独自のものでないし，まったく新しいものでもなく，すでに前世紀から巷間ごくふつうに聞かれたことである。だがそれを単なる常套句でなく，共和制に基づく建国の実践課題と結びつけ，また家庭における母親の役割として押し出したのが，この国この時代における新しさだった。当時の女性雑誌にはそのような女性の積極面を正面から論じた記事が満載された。高級輸入衣料などで派手に着飾った女性像は単なる風刺や軽侮の対象としてでなく，着手したばかりの建国の取組みに有害な分子と論断された。男性の側でも，家事において女性が果たしていることの重要性を，共和制と結びつけて認識した。「男は法律を制定し実施する面でたしか

な注釈を付している。「歴史家の中には，18世紀末のアメリカの変化を，独立革命の影響と見るより，もっと長期にわたる〝近代化〟と呼ぶ趨勢の所産と解する人々がいる。しかし合衆国における発展の多く，とりわけ女性教育の分野における発展は，共和主義イデオロギーと密接に結びついており，海の向こう大英帝国には当時見られなかったものである。革命はたしかに特定の進行中の趨勢を加速し深めたにすぎないと言ってもよいが，だが戦争がその後の数十年にわたる女性の生活に強烈なインパクトを及ぼしたことは，否定しがたいように思われる。」(ibid., p.360, note 1.)

15) ibid., p.235.

16) ibid., pp.229-242.

に優れた力を発揮する…が…女は，あらゆる自由な国家において，行い（マナー）の絶対的な統治者である。そして共和制のもとで行いは法律と同じだけの重要性を持つものと認めざるをえない。」「最も未開の段階から文明の最も進んだ段階にいたるまで…母親こそが，子どもの幼児期と青年期の行いや情感（センチメント）を磨くことで，子孫にたいする最重要の役割を果たすと考えられる。」「女性が共和制における自由の諸原理のなかで十分な訓練を受けるべきとするのは，きわめて重要なことだ。いにしえの最初の愛国者たちのある者は，彼らの母親によって陶冶されたのだ。」したがって植民地時代の伝統となっていた父親―男の子，母親―女の子という関係の図式は後景に退き，母親役とは何より男の子を立派に育てる課題となった。

かくして，女性の徳性と知性を称え女性の政治的，社会的貢献を強調する共和主義の思潮は，同時に「男は仕事，女は家庭」という規範をついぞない高みに押し上げたのである。共和主義を掲げる論者にして，女の運命は結婚して子どもを産むことであり，また少女はそのような目的に向けて修練さるべきだという通念に，正面きって挑戦した者はほとんどいなかった。1792年に，女性は妻や母としてよりまず個人として見られるべきだと説いた一冊の書物が刊行されたが，それにたいする反響は圧倒的にネガティヴなものでしかなかった。[17)]

③　第3点。女性の教育に大きな変化が生じた。共和制下の理想的な女性像は，愛国者で，自分の頭で考え，高い徳性と知識を有し，有能な家事の管理者であって，昔の主婦に求められたものと大きく異なる。そこに到達するのには正式の訓練が必要だということに，社会的な合意が形成された。

植民地時代ほとんどの女の子の教育は，家庭内で終始していた。それも躾けが中心で彼女が読み書きを身につけるかどうかは，親やまわりの大人次第だった。ほかに町の子には「デイム・スクール dame school」と呼ばれた，一人の女性が自宅で何事かを教えてくれるような場もあったが，その質や内容はさまざまで単にベビー・シッターの役目を果たしていたようなものも少なくない。革命前夜にはアドヴェンチャー・スクールという，やはり女性（あるいは夫婦）が自宅で行う初等教育の機会が加わったが，そこで教えるのは音楽，ダンス，手芸，縫い物などが多く，読み書きのスクールが多少あったにせよ，男の子の機会とは歴然たる差があった。男子をハーバード，イェール，プリンストン等に送って高等教育を授けさせたその同じ家庭が，女子にはごく限られた初等教育の機会しか与えなかったのである。女は縫い物や料理ができれば十分，というだけでなく，「行き過ぎた教育は女を女らしくなくする」という観念が，社会を制していた。

女性がよりよい教育を受ける必要性が説かれ，多くの女性もそれを求めるようになるのは，1780年代，90年代以降のことだといってよい。教育がけっして女らしさを損なうものでなく良き妻や母を育てるのだ，女らしさを育むには従来と違うカリキュラムが必要だ，女にも共和主義的な市民になることが求められている，といった論調が，このころから登場する。それは少女向け初等教育の実践の広がりを生むと同時に，それとほぼ並行して，より高度の「アカデミー」設立のブームを呼んだ。アカデミーにおいて具体的に主張されたカリキュラムは，なお総じて女性向けの実用的な科目が主であったが，それを越える発想も生まれた。ベンジャミン・ラッシュが1787年，「フィラデルフィア・ヤング・レディーズ・アカデミー」に導入しようとした科目群は，彼の次のような思考に基づくものであった。「女性教育は（合衆国における）社会状態，行為，政府の実態に適合するものでなければならず，……大英帝国におけるものとはきわめて異なる原理，あるいはわれわれが君主制下にあった時代と幾つかの側面で異なる原理の上に施行されなければならない。」彼がいうには，アメリカの女性は，夫を助けあるいは自分たちの資産を管理するために簿記と筆記の訓練を受けるべきであり，子どもたちにきちんとした教育ができるよう自ら歴史，地理，自然科

17）ibid., pp.243-250.

学，宗教を身につけるべきである。これまでの女子教育のように，デッサン，フランス語，器楽演奏のような浮ついた気晴らしばかりの教養に比重をかけるべきではない。ただし声楽とダンスは認められる。なぜなら，歌うことは女性の家事への気遣いを緩和するであろうし，踊ることは健康に良いだけでなく，家庭内で機敏に動く身体をも作り上げるだろうからである。ニューイングランドを中心にして全国にひろがった女性のためのアカデミーの多くは，縫製，音楽，ダンスといった昔ながらの教科を含みつつも，作文，歴史，地理などに力を入れて，男性の教育との差を幾分なりとも縮めた。教師集団を擁し，恒久的な専用の建物を用い，長期に存続する機関が増えた。また大都市住民だけを対象とせず寄宿舎を置くものが続出した。

こうして共和制のもとで少女の教育は義務として意識されるようになり，その義務は親のものであるとともに少女たち自身の義務となっていった。少女の教育を容認し義務化する発想は，同時代のイギリスおよびヨーロッパ大陸諸国をはるかに上回っていた。そのような教育の頂点に立ったアカデミーが，以後アメリカ女性の知識人，著名人，リーダーの明確な供給源となる。しかし再度留意されなければならないのは，上のベンジャミン・ラッシュの理念に代表されるように，最高度の女子教育といえどもそれは家事にすぐれた女性を育てるための教育なのである。家事の必要ということを越えて，男と同格の教育を受ける権利を主張するような論説は，まったくの例外でしかなかった。[18]

(2) 変化要因としての共和国思想と市場経済

i）共和国思想

独立革命を通して女性の地位や役割がどう変わったかを問題にするさい，ノートンの *Liberty's Daughters* は最も重要な基準文献だと思うので，これまでやや詳しく論旨を書き出してみた。同書を随所で引用，参照している他の研究書は数知れないが，そのさい何らかの批判を含む論評を加えたものには，私はまだあまり出合っていない。だがここで敢えて，目に留まった二つの論説を取り上げてみたい。いずれもノートンの所説を明確に俎上にのせ正面きって批評しているとはいいきれないけれども，少なくともノートンとは異なる強調点を意識して書かれていることを窺わせるものである。

ひとつは，これまでにも参照した有賀夏紀『アメリカ・フェミニズムの社会史』におけるものである。有賀氏がノートンに直接言及しながら自説の強調点を対置しているのは，次の文章である。

> ……ノートンは，（独立革命を境にした）……女性の問題についての関心の高まりは独立戦争における体験と共和国思想の両方から直接出てきたものだとし，その著書においては特に戦時下におけるアメリカ女性の体験を詳しく描き出している。しかし，私は，共和国思想の役割こそ，もっと強調されてよいと思う。戦争における銃後の女性の働きとそれにともなう社会の女性に対する評価の変化は，独立戦争に限らず戦争一般に見られる現象であり，必要に迫られての適応という一時的な性格が強いのに対し，共和国思想の下での女性の役割についての認識の変化は，アメリカ革命独特のものであり，原則に基づく思想的根本的な意味を持ち，より永続性があると考えるからである。[19]

これだけを読むと，ノートンは同書で，独立戦争における体験の方を詳しく描き共和国思想の影響にあまり紙幅を与えていないように思われそうだが，実際には第2部で戦時と戦後にほぼ同量の配分（2章ずつ）で記述が与えられているし，前段の戦争体験の中にもすでに独立戦争へのかかわりを通じて女性が共和主義，自由主義，平等主義に目覚めていったことを，相当に書き込んでいる。女性たちの独立戦争体験とそれが生んだ行動を，「戦争一般に見られる現象」とだけ読み取れない。その点，有賀氏の論評にやや違和感をおぼえないわけでないが，だが上の引用部分の前後の記述を読み有賀氏が本

18) ibid., Chapter Nine (pp.256-294).

19) 有賀夏紀『アメリカ・フェミニズムの社会史』(1988年) 20頁。

当に言いたいことをあらためて考えてみると，別の感想にも近づく。氏の主張では，アメリカ女性史の大きな流れの中でこの時代の特質を何より市民革命における共和国思想の台頭を根底にとらえるべきだということが主眼であって，その意味で独立戦争体験と共和国思想の両方に等量のバランスをもたせること自体，歴史観として不当だということになるのかもしれない。さらに，共和国思想の影響という側面も，その後今日にいたるまでの思潮の源流ということからすれば，ノートンが述べる論点（私が3点に要約した内容）では不十分だと，有賀氏は考えているかもしれない。氏の文脈では，共和国思想といえども（ロックに代表されるように）もともと女性を排除する思想であったものが，アメリカにおいては女性をも含むものになった，その鍵となったのが女性の母としての役割であり，そのことを契機にして女性の位置づけが「共和国の母」にまで昇華したというのが，基本的なことである。当時の共和国思想は，一方で全体の善のために個人の意志を犠牲にする公徳心を説き，他方で個人の意志と行動の自由を唱えるという，矛盾した価値観でなりたっていた。アメリカにおける「共和国の母」観は，女性の義務を，自己を犠牲にして家族のために奉仕し，夫と息子が個人として自由に活動できるようにするというふうに説くことで，この矛盾を解消した。そしてそのような女性の立場が，19世紀を通じてアメリカでの女性の社会活動の基盤になると，有賀氏は見通すのである。この，共和国思想の二つの矛盾する価値観という指摘じたいはノートンのもので，有賀氏はそれについては肯定的に引用しているのであるが，ノートンがこの論点を歴史の長期的な展望に十分生かしていないと氏は判じたのであろう。[20)]

なおノートンは，すでに本稿の前章(4)で紹介したように，後年（1996年）に刊行された別の著作 *Founding Mothers & Fathers; Gendered Power and the Forming of American Society* で，イギリスから持ち込まれたイデオロギーがアメリカ植民地で徐々に変容する過程を検証し，やがて共和主義思想がアメリカ女性の役割を「共和国の母」なる表看板のうちで家庭内に押し込めることになるという展望を与えている。この著作では独立戦争体験を通じての女性の変化が扱われていないぶん，それだけ共和主義の長期的な影響のほうに筋道がつながっていく気味が強いが，その内容をもって有賀氏の論評に答えることになるかどうか，私には断言できない。

ii）市場経済とのかかわり

もうひとつの論説は，これも本稿の前章でとりあげたジーン・ボイズトンによるものである。すでに見たようにノートンらに較べてボイズトンの研究の特徴は，植民地時代にかんしてすでに社会経済的な変化要因 ── 特に市場経済の浸透 ── に大きな比重をおいて論じていることである。その観点を重視したとき，革命戦争から建国期にかけての女性の変化はどのように説かれうるか。それをノートンの所説と比較するとどうだろうか。

ボイズトンが着目した植民地段階からの市場経済の浸透は，本質的に自給自足性の強い経済の中に長期にわたって徐々に進行したものである。その緩やかな過程が，家事労働そのものの内実があまり変わらないのに，家事にたいする社会的評価を貶めていったというのである。この，家事労働の内実に大きな変化がないということは戦時下でもそうであって，革命戦争が直接にもたらした経済要因 ── イギリス商品のボイコットや途絶による家計内容の変化，紡織などの自家生産 ── はさして大きな意味をもたないと，ボイズトンは考え，次のようにいう。開戦で不足をきたした重要な製品は金物，農具，家庭用品，家畜類，穀物などアメリカでは男の労働の産物であって，それを戦時下に女が作り始めたということではなかった。また女が糸を紡ぎ布を織るのは開戦前からのことで，米英間の抗争にそれほど対応していない。開戦によって生産が増大したのはスチール，火薬，塩，紙，ガラス，陶器，鉄器などであって，いずれも女による製品ではない。男が戦争に行っている間

20）以上は，有賀上掲書の19-28頁の記述に基づく。

に女が農場を管理した類いは，必ずしも開戦による新しい出来事ではなかった。[21)]

たしかにこの独立戦争は，主戦場を植民地のあちこちの都市に転々と変えながら展開した傾向が強く，全土に戦火が燃え盛ったわけでないし，武力による戦いが最も激しかった1776年でさえアメリカ軍の総勢は約9万人，武器をとることのできる男の8分の1程度だったと推定されている。長期にわたって男がすっかり出払い女が銃後を守ったというような状況ではないのである。[22)]

だから，革命戦争期にも女性の家事労働の内容そのものに決定的な変化が生じたのではなかった。にもかかわらず戦時下，その家事労働に突然また光があてられ，重要性が広く認められるようになったのは何故かと，ボイズトンは問題をたてる。答えの方向はやはり，植民地時代の変化の解釈と同じく「主婦の概念の変化は，家事労働そのものの性格や経済的価値の変化によるものよりも，より大きな社会的，経済的な状況の変化を反映している」ということである。その状況変化の重要な端緒として，植民地時代後期に徐々に後退しつつあったコミュニティからの個々人の生活や行為にたいする関与の度が，再び強まったことが取り上げられる。たとえば商店主が商品を秘匿すれば愛国者がそれを襲って奪ったその社会正義論を家庭にも及ぼして，茶を貯めている家があるという噂が流れると，コミュニティーはそれを確かめ公正な価格を決めて各戸に分配した。ボイコット商品を使用しない主婦は賞賛され，そうでない主婦は非難された。兵士の家庭にたいしてはコミュニティがさまざまに面倒を見，またタウンによっては兵士への給料を基金としてコミュニティーが管理し，家計の安定をはかった。多くの主婦が家庭内でおこなっている縫い物，ビスケット作り，夫の看護などは，それが兵士の妻によってなされるなら国や地域社会のための仕事と見做された。軍隊の必要物資に関連して制定された当時の法律は，しばしばそれまでの通例だった〝he〟にかわって男と女の両方を主語においたが，これは女性の家事労働を国が「経済」の重要な要素として認めたことを意味する。戦時下に貨幣の機能と比重が後退し物々交換の比重が全般的に上昇したこととも相俟って，家内における女性の仕事が社会的な地平で見えるものになり，もともと可視的な性格の強い女性労働に社会が交換の価値基準を求める傾向さえ生じた。こうして家事労働が「経済的な労働」の範疇に再び取り込まれることになった，というのである。[23)]

独立戦争が及ぼした影響をこのようにおさえたあと，その後の建国の基礎固めの時期に家事労働への評価がどうなっていくかというくだりでは，ボイズトンの分析視角からして当然というべきか，次のごとくである。戦争が終わると市場経済は戦前より一段と高いレベルで復活してくる。家計の中にも，学校教育，他人の雇用，肉屋，革なめし，紡織の仕上げ，仕立て屋，製靴，婦人帽子……と，外部の労働にたいして支払う部分が増えてきた。生活の最低部分をなお自給的な労働で賄ってはいても，洗練された家庭生活のためには市場への依存を高めなければならないことが，ますますはっきりする。当初はその多くが物々交換だったが，そこに貨幣が混入する度が増すにつれて，貨幣というビジブルな尺度で測られる労働と測れない労働とへの評価が開いてくる。妻たちの中でも行商や出稼ぎ，女中や洗濯女，産婆や看護婦，裁縫，夫の商店の手伝い等々で現金を得ようという動きが進行したが，とはいっても圧倒的に現金収入につながるのは男の労働である。しかも同時に，その妻たちは，市場から買う素材（布，粉，獣や鳥や魚……）を従来とは違う目的や仕方で多様に加工することを求められ，かつまたその素材の価格変動を巧みに凌いだり利用したりする新しい技巧をも求められた。つまり家事の内容に生じたこうした変化は，妻が夫のおこなう経

21) Jeanne Boydston, *Home & Work; Housework, Wages, and the Ideology of Labor in the Early Republic*, 1990, pp.31-32.

22) 拙著『アメリカ職人の仕事史』1996年，58頁。

23) Boydston, op. cit., pp.33-34.

済的（＝「生産的」）な活動に従属しそれを家庭内で十全に活用する役割を推し進めるものだった。[24]

と同時に，「共和国の母」イデオロギーが家庭内に急速，強力に浸透する。すでにノートンの所説にそくして述べたように，家事労働における子育ての重要性がこの時期，突出して論じられるようになった。ボイズトンは，建国期の子育て重視の風潮には一定の人口学的な根拠があり，たとえば1800年に合衆国の人口の34.6%が9歳以下の子どもで占められ，「新国家はまさに子どもの国であった」ともいうのであるが，それにしても，植民地末期までは男親が男の子，女親が女の子の訓育を担うのがふつうだったのにたいして，「1800年までにはもう，父親たちは子どもの主たるインストラクターだというかつての役割を失っていただけでなく，関連文献からも姿を消し始めていた」。夫婦間のこの役割変動はやはり，共和主義の社会観の所産である。

> ……家事労働史にとっての主たる重要性は，共和主義者の説く母親の特性（motherhood）が，女性のほかの仕事の意義をほとんど除外してしまう――これは彼女たちの生活の現実とはまったく相容れない家内労働観である――ほどに，子育ての責任を強調するようになったことである。……女性労働という視界の中で，共和制的な母親像のイデオロギーが与えた全き重要性は，18世紀アメリカの市民的共和主義の政治文化台頭の文脈においてのみ，説明できる。[25]

これを言い換えれば，市民的共和制は，母親による子育ての役割を強調することで，経済的な役割のほうを稼ぎ手たる男性にしぼる口実を復活させた。しかもこの共和国家の市民権は財産権と経済的な立場によってこそ保証されるので，共和国の「真の市民」とは，自分の下に妻や子どもをかかえて庇護している男を指す概念となった。こうして「経済的」の意味が，圧倒的に市場との関連性を強める。そのことは，この独立後建国期の一つの締めくくりと考えられる1812年戦争時点の，家事労働にたいする評価に端的に現われた。イギリスとの2度目の戦争は，もはや独立戦争時のような家内労働の価値の積極的な再考を生まなかった。ホームメイドの重要性を訴える論説がなかったわけではないが，それは多分にシンボリックなもので，むしろ「主要な呼びかけは，ホームスパンをというよりアメリカの工場で作った織物をということ，真の愛国的行為はホームメイドというよりアメリカ製品だということのほうに，多く向けられた。」こうした推移の中で，建国の課題のなかにアメリカ社会の「工業化」の課題が徐々に切実さを増してくることになる。[26]

以上がボイズトンの論旨だと思われる。この論旨は先にも述べたように，アメリカ経済史のユニークな議論となっている市場革命論との結びつきを感じさせて興味ぶかいものであるが，市場革命論そのものの議論や全貌がまだ十分に知られたものでないので，このことにたいする私の立ち入った意見を，ここでは控えることにしたい。

24）ibid., pp.35-41.

25）ibid., p.43.

26）ibid., pp.43-55. 独立革命期に興った家内生産の推奨を，アメリカ経済の工業化論者が工業振興の課題と結びつけて説いたことは，早くから見られる特徴である。アレグザンダー・ハミルトンによる『製造業に関する報告書』（1791年）にも，次の記述がある（田島恵児ほか訳，64-65頁）。「…家内製造業が広範に展開しており，それは，われわれが詳細な調査の対象とする前には想像できなかったほど社会への供給に大いに貢献している。…粗製毛織物，上衣用布地，サージ布地，フランネル布地，毛麻混織製品，毛糸，綿糸およびその他の糸製下着類，粗製ファスチアン布地，ジーンズおよびモスリン，格子縞模様および縞模様の綿製品ならびに同種の亜麻製品，ベッド側地，ベッドカバーおよび掛けぶとん，粗麻布，粗製シャツ地，敷布地，タオル用および食卓用亜麻布，および，種々の綿毛混織製品および綿麻混織製品が大量に家内製造業の方法によって製造されている。そしてそれらは，多くの場合，それを製造している家族の需要を賄うのに十分であるばかりでなく，販売用にそしてある場合には輸出用にさえ十分なほど製造されている。多くの地域において，住民の使用するすべての衣料の3分の2か4分の3，いやそれどころか5分の4までが自給されていると算定されている。この数年間に家内製造業が遂げたと見られる非常に大きな進歩は，道徳的および政治的見地の双方から考えて，極めて興味深い重要な事実である。」

(3) 「共和制的」主婦像 ── ナンシー・F・コット『女の紐帯(ボンド)』

独立戦争とそれに続く合衆国建国期（19世紀初頭まで）に，家事労働に他国にない高い価値が認められると同時に，「家庭＝女の領域」観が共和主義思想と結びついて確立してきた所以を，ノートン等の著述からたどってきたのであるが，この章の最後に，さらに一冊の文献 ── ナンシー・コットの著作 ── を加えておきたい。コットの研究は，本稿前章で，ニューイングランド植民地における離婚訴訟を分析した2論文（1976-77年）を紹介したが，この2論文にすぐ続いて刊行されたのが，ここで取り上げる *The Bonds of Womanhood* である。[27] 新国家建設の確たる方針が定まらぬ混沌たる社会状況の中で女性と家事労働とがどんな処遇を受けたかという問題を主題にした著作として，やはり欠かせない一冊であるとともに，対象をニューイングランドに絞っているとはいえ，ノートンなどよりもっと後の時代（1820～30年代）まで視野に入れて建国期全体の家事労働の特質を総括する構成をとっているという読み方もできそうである。表題にある「紐帯」（bonds）とは，この時代の女性への束縛と女性の結束との両面の進展を指す。同書は5章から構成され，建国期の女性の仕事，家庭生活の内容や重点，女性の教育，宗教の役割，女性連帯の展開の順に詳述している。同書の順に沿って ── ノートンやボイズトンの所論との重複や異同があるがそれにあまりこだわらず ── 要約し，建国期全体のまとめにかえたい。

第1に，工業化と市場経済の家事労働への影響である（主として第1章〝Work〟による）。イギリス商品の不買運動を契機とし，むろん道具の進歩にも促されて，18世紀末から木綿，亜麻，羊毛などを原料とする家内での繊維生産が全土に広まった。しかしやや遅れてニューイングランドに興った工場制の繊維工業が，19世紀に入ると次第に家内生産を圧するようになる。工場に雇われたのは若い娘ばかりだが，彼女たちはこれまでの女中，家事見習いとは違う活動の道を与えられ，家庭に貨幣を持ち込むことで家事にも影響を及ぼした。一方，製靴，衣服製造，帽子製造などの分野では家内問屋制が広がって，この面からも女性労働を通じて貨幣が家庭内に入ってくる。また町では，部屋貸しや下宿人を置いて収入を得ようとする主婦たち，あるいは商人の妻が品物を小売りする姿などが，頻繁に見られるようになった。要するに，夫の家庭外での仕事からばかりでなくさまざまなルートを通じて貨幣および市場経済が都市と農村の家庭に浸透し，その中で女性も現金取得に応分の役割を果たした。主婦には明確に「ショッピング」という仕事が加わった。とはいっても買物にかんする権限と責任は夫に属すると一般に見られた。つまり貨幣の世界は収入，支出ともに男の世界であるという通念は，壊れることがなかった。

第2に，前述した家と家内労働の見直しを契機とする，「家庭」礼賛のブームである（主として第2章 Domesticity による）。家族の生活や育児や女性の役割にかんするエッセイ，説教，小説，詩，手引き書などが，1820年代，30年代をピークとして世に氾濫した。内容は，母親としての責任，子育てから，女性の社会的役割，女性にふさわしい教育，女性に求められる礼儀作法，等に及ぶ。多くの論説に共通していたのが，家庭(ホーム)と社会(ワールド)を対照させて，家庭を「砂漠のなかのオアシス」「思いやりと信義と徳性を集めた聖域」「男たちがビジネスの苛立ちや困惑を忘れ，激務を離れて休息をとり，愛を交換して気苦労から解放される場所」「男の最良の同情心，嗜好，道徳心，宗教心等が育っていく場所」「純粋，無私の愛の宝庫」等々として描き，他方で社会を「個々人が荒涼感を募らせ」「すべてが正義と名誉の規範から量られ正直など一顧だにされず，細やかな道徳が傷つけられ，全体の善が個人的利害優先の犠牲になる」ような場所として描く傾向だった。[28] このような対照づけの背

27) Nancy F. Cott, *The Bonds of Womanhood; "Woman's Sphere" in New England, 1780-1835*, 1977.

28) ibid.,pp.64-65.

後には，「ワールド」（物質世界）を「ヘヴン」（精神世界）の対極において蔑んだキリスト教の教義の再興と，「ワーク」と「ホーム」を対照させる19世紀の新しい社会思想との結びつきがあったとも，コットはのべている。家庭的なるものへの称揚は当然に，女性が結婚によっていわば天職を得るのだという結婚観とともに，理想的な男性に行き会うことを無上の幸せと考える人生観を女性の間に広めた。結婚への女性の期待は18世紀にはなかった高まりと質の変容をみせた。

第3に，この期を境に主婦労働の重要性の首位に育児の課題が「躍り出た」（第1，2章）。家事労働の再評価を促した力は何より，有徳の市民を生み育てる女性の役割（＝「共和国の母」）ということにあった。近隣者や親方や親戚・兄弟等々コミュニティの人間関係のなかで子が育つという18世紀的通念に代わって，家庭とくに母親による幼児期からの育児がその子の運命を決すると見る風潮が圧倒的に広まった。母親が常時，家の中にいなければならないのは，何より育児のためである。市場経済のおかげで家事労働の量は軽減されてきているが，子育ての責務は他の労働の軽減を上回って高まっている。1800-1820年ころのニューイングランドにおいて，聖職者たちの説教は，それまで家庭の育児のなかで母親は物質的な側面を担当し父親が宗教的，道徳的，知的な教育を担うべきだと教えてきた家庭像を離れ（むしろそうした観念を攻撃し），母親こそ子供の良識，情感，習慣に最も強く影響する存在であるという基調に転じた。家父長の権威そのものは否定せず，しかし子育てにおける母親の専門性を強調したのである。聖職者が説くその専門性の内実を満たすのは，生やさしい仕事ではない。育児書がいうには「子育てには多大の犠牲と無私の行為が必要です。それが理由で多くのことを犠牲にするのを喜ばないような女性は，母親となる資格がありません」。こうしてアメリカに，子供の養育を中心とする家族像，母親が子供の道徳・情操教育の中心的役割を担う家族を「近代家族（モダーン・ファミリー）」と見る，新しい家族像の伝統が緒についた。[29]

第4に，子育てを中心とする新しい主婦像からして，女性が教育を受ける必要性が社会的に認知され始めた（第3章）。17世紀，女性の教育は不要であるばかりか危険だとさえ考えられ，コミュニティが設けた小学校も男の子だけのものだった。女の子はたとえば文字や計算を覚えるとすれば自宅で習うしかなかった。ニューイングランドの入植第1世代の識字率は男で半分くらい，女で3分の1くらいだったろうと推定されているが，それが初等学校教育のおかげで植民地時代の末期までに男の識字率が80％以上に上昇したのにたいして，女はせいぜい40～45％の水準にとどまっていた。[30] 独立後の教育熱のなかで，急増した小学校は男の子だけでなく女の子にもひらかれ，これをスタート地点に女子教育の新しい時代が開かれる。1787年フィラデルフィアにおけるヤング・レディーズ・アカデミーの創設を皮切りにして，[31] 女性

29）アメリカ研究札幌クールセミナー『変貌するアメリカの家族』（1986年）における報告者の一人C. N.デグラー教授は，近代家族の概念に他の特徴も加えたうえで，それらは「19世紀中葉まではごく少数の家族のみの特徴であって，独立戦争以前には，ここに述べたような《近代家族》はアメリカには皆無であったといってよい。それは恐らく独立戦争後のほぼ50年間，即ち1775年から1830年の間に現われ，やがて急速に支配的家族形態になっていったと思われる」（29頁）とのべている。

30）ただし18世紀後半に若い女性向けに読むことと裁縫とを教える夏季講習がひろがったので，文字を書けなくとも読める女性の割合はもっと高かったろうともいう。Cott, op. cit., p.103.

31）レディーズ・アカデミーの創設については本稿ですでにノートンの所説からも紹介したが，ここでコットの記述をもとに再度，紹介しておく。その創設者Benjamin Rushの理念は，虚飾にすぎないイギリス女子教育のモデルを排し，社会と政府の必要に適合する新しい種類の教育を行おうというのだった。アメリカの女性はイギリスよりも早婚であるがゆえに，短い年月に有効な教育を集中的にほどこさなければならない。「有効な」というのは，共和制の広がりのなかにおける妻としてと母としての責務のことである。夫がビジネスに励んでいるとき，子供を鍛える主要な役割は女性に担われるのであり，その女性は聡明な母親となるべく教育を受けなければならない。さらにイギリスのように永続的かつ有能な女中を得ることができない共和国では，「レディー」がやがて自ら家事を切り盛りで

にたいする中等教育の機会も広がった。とはいいながら当時は女子教育への反感や反論もけっして絶たれることがなく，それがさまざまの論拠で主張されている。19世紀を通じて女性の高等教育への道には幾多の険しい障害が立ちはだかることになる。

第5に，独立革命を転機とする女性の社会的地位の向上に，宗教がことさらに強力な後押しをした（第4章）。もともと植民地時代からニューイングランドの教会では女性会員数が男性会員を圧倒しており，牧師たちも次第にそのことを，女性にそなわる情感，繊細，想像力，憐憫といった天賦の資質の故であると，肯定的に説明するようになっていた。1791年合衆国憲法修正第1条によって信教の自由と政教分離が明示されて以降，国家から独立し自治を保つおびただしい教会各派が誕生するが，その多くは共通して教義の厳格な解釈よりは純粋な信仰の高さを尊び，そのなかで「プロテスタンティズムの女性化」がいっそう顕著になる。当時のいわゆる第2次大覚醒における女性の回心者は男性の2～3倍にのぼったとされる。トクヴィルが『アメリカの民主政治』で看取したように，当時のアメリカは個人的意志に負う多数の団体(voluntary association)が世界で最も多く結成された国であったが，そのなかで女性が多く参加している団体あるいは女性だけで構成される団体といえば，ほぼすべてが教会とのつながりをもった組織だった。他方，男たちの団体は世俗的，市民的，政治的，職業上等の広い幅にわたっていた。このように，ことさらに女性が宗教を武器にして社会とのつながりをもってくるということが，19世紀アメリカにおける女性の社会進出の大きな特徴となる。彼女たちの宗教活動の一環として，町という町におびただしい慈善協会，教育協会が生まれ，1815年から以降には各地に支部をおく全国規模の慈善活動協会も出現する。[32] これらは19世紀末からの労働市場におけるウェルフェアのルーツともなる。

第6に，主婦のつとめ，「神の下の国家」における役割，等への高い評価におされて，建国期はアメリカの女性の間に，他の時期とは量質ともに異なる同性の連帯感情（シスターフード）が醸成された（第5章）。女性はその本性からして知力や能力でなくあくまで「心（ハート）」をもって他人と結びつくのであるが，男女の相補性があくまで女が従となる関係であることからして，真に平等・互恵的な他者との関係は女性間でこそ可能となる。「女以外の誰が女のハートを知ることができるだろうか？」女性の教育水準が上がったことから，友人間での手紙のやりとりが激増し，互いの熱い友情が鼓舞され書き連ねられた。むろん教会は女性が友情と連帯を育む最も重要な場だった。独立革命後の男たちが社会における平等や人権を高唱していたとき，女たちは女だけのルートを通じて初めて「同等」の人間関係のすばらしさを味合うようになった。だがそれはまた，男とは異なる女共通の天職を「社会」に対置される「家」に置く教義の論拠ともなったのである。

きるよう，訓練される必要がある。妻は，家事への有能なエコノミスト，キリスト教的モラルの擁護者，自由を愛する息子を育てあげる母親として，良識ある夫にふさわしい「伴侶」（コンパニオン）――共同生活の単なるパートナーではなく――となることが期待されている。ラッシュの考えはどこまでも実利的，機能主義的であって，女性が学ぶ機会を得たり知識の進歩に与ることの権利，公正さを説いたわけではなかった。(ibid., pp.104-105.)

32) Cott, op. cit., pp.125-135. トクヴィル『アメリカの民主政治』講談社文庫(下)44-45頁。井門富二夫氏は，アメリカ合衆国が信仰の自由と政教分離を絶対的原則として憲法にもりこんだところの，「宗教国家」として成立したと述べる。この社会では「神」が各教派の信条を越えた究極なる概念として抽象化され，そのような神との契約（＝コビナント）を結ぶことですべての人間は自由で平等な存在となり，そうした人々との契約（＝コントラクト）によって国家が成立する。この意味で合衆国はあくまで「神の下の国家」なのであって，政教分離によって国家が非宗教的な存在になるのではない。(井門富二夫編『アメリカの宗教』(弘文堂 USA GUIDE 第8巻，1993年，18-22頁)。19世紀に女性が唯一，宗教活動においてしばしば男性を凌駕したことの意義も，こうした社会の中のこととして説かれるべきであろう。

4．キャサリン・ビーチャーの家事指南に見る19世紀の家事労働

(1) ビーチャーの生涯と思考

前章において，19世紀初頭までにかなりアメリカ的な特質を含んだ家事労働観が生まれた所以と内容を追ったのであるが，それに関する諸論説では総じて「家事の内容にはさしたる変化がないのに，家事にたいする社会的評価が大きく変わった」ことが強調される傾向があった。だが建国をめぐる模索と論議が一段落するころから，家事そのものの変化と選択可能性が徐々に実感され，ひとたびかちえた家事の社会的評価をどう維持するか，あるいは社会の近代化（同時に工業化）に対応して家事をどのように合理化できるかという，新しい関心が募ってくる。かくして19世紀中期以降のアメリカには，家事にかんするいわゆるハウツウ書（または記事）が市場に氾濫するようになった。[1] そうした幾多のハウツウ文書の中から頭角を現わし，ついには19世紀を通じての家事指南書の聖典とされるほどの権威を打ち立てたのが，キャサリン・ビーチャーの著述である。

本章ではキャサリン・ビーチャーの所論をやや立ち入って読み，そこから19世紀の家事労働の内容や課題がどのように透けてくるかを考えてみたい。直接の対象にするのは，キャサリンの著作の中で最も広く長く読み継がれることになる，妹のハリエット・ストウとの共著 *The American Woman's Home*（1869年）である。[2] 同書は2002年に復刻されたが，そこには女性

1）本稿の前章でナンシー・コット『女の紐帯』の論旨をまとめたさい，その第2点として，1820-30年代に家庭をテーマにしたエッセイ，説教，小説や料理を始めとするマニュアル記事等が急増したことを書いたが，そうした文書の中に家事アドバイスが混ざるかたちで，それは始まったようである。だが通常，アメリカにおける最初の主婦向け家事アドバイス・マニュアルとされているのは，Lydia Maria Child（1802年生まれ，22歳にして小説家として頭角を現わし，24歳の時アメリカ最初の児童向け月刊誌を創刊。先駆的に奴隷制廃止の論陣をはり，さらには婦人参政権の活動にも参加したことで知られる。1880年没。）が1829年に出版した *American Frugal Housewife* である。発刊から1850年ころまでに35版を数えるほどの人気を博した。同書は1999年に復刻され容易に入手できる。100頁余りの小冊子であるが，内容の大部分が家庭での料理をめぐる提言であり，いかなる食材をも良い状態で無駄なく完全に消費する課題――買物，調理，保存などすべての側面におよぶ――と，あわせて主婦労働の時間をいかに節約するかの術を強調している。こうした家事マニュアル本と合わせて，東部の諸都市では Home Monthly, Home Almanac, Housekeeper's Annual など雑誌が刊行され，さらに地元新聞にも家事にかんする記事や助言コラム等が頻出するようになった。ボストンの女性雑誌 Ladies' Magazine は1837年にフィラデルフィアの Godey's と合併して全米トップの女性誌となる。1860年の発行部数15万部という。（Sarah A. Leavitt, *From Catharine Beecher to Martha Stewart: A Cultural History of Domestic Advice*, 2002, pp.5-6, 10-11, 17.）

Marilyn Yalom, *A History of the Wife*, 2002（林ゆう子訳『〈妻〉の歴史』2006年）には，「1830年代から40年代に始まった，妻や母親を対象とした英米のマニュアル本の洪水」（訳書231頁）と，「洪水」がアメリカだけでなくイギリスにもあったことを記述している。1869年出版のビーチャーの書物がアメリカの家事指南の代表作だとすれば，同じころのイギリスでそれに匹敵するほどの知名度を獲得したのが，イザベラ・ビートン執筆の『ビートン夫人の家政読本』（原題は *Mrs Beeton's Book of Household Management* だが通常は「ビートン夫人もの」'Mrs Beeton' という呼び名で知られた。2000年に Oxford World's Classics シリーズの一冊として復刻されている）で，1861年の発刊から1868年までに200万冊売れたという。アメリカでのこの種の書物には当初，イギリス出版物の翻訳ものも少なからず含まれていた（本章の注4を参照）。河村貞枝・今井けい編『イギリス近現代女性史研究入門』（2006年5月）では，イギリスにおいてもやはり男女の活動領域を公私に分けた上で，女性が担う家庭こそ道徳を育む大切な場だと教える風潮が，19世紀前半に広がったことを述べており，家事マニュアル本の盛況の背景には両国にかなり共通する状況があったと思われる。したがってどこまでをアメリカ的特性と考えたらよいかは大きな問題であるが，今日の研究状況ではまだ，そのことに十分立ち入った議論や判断ができなさそうである。だが今後の課題として常に念頭におくべきであろう。

2）Catharine Beecher and Harriet Beecher Stowe, *The American Woman's Home*, 1869. 本稿で使用するのは，2002年に Harriet Beecher Stowe Center が復刻したペーパーバック版であり，オリジナル版とはページの対応が違う。以下に記すページ数は2002年版のものである。

史・家政史の研究者ニコール・トンコヴィチによるかなり長文の解題が付せられている。今日の女性史研究者からどのように読まれ評価されているかを窺ううえでも興味ぶかいので，まずこの解題に沿ってビーチャー像を概括する。[3)]

キャサリン（1800-1878）は，聖職者・神学者として知られるようになる父ライマン（Lyman Beecher, 1775-1863）の最初の子としてニューヨーク市郊外のイースト・ハンプトンに生まれた。ライマンは3人の妻によって13人の子をもうけるが，キャサリンの弟や妹にはエドワード（牧師・教育者，1803-1895），ハリエット（小説家，1811-1896），ヘンリー（牧師・著述家，1813-1887）など，後世に名を遺す英才が輩出しており，ビーチャー家は当時きってのインテリ一族であるとともに，全員が熱烈な奴隷制反対論者であって，とくに妹ハリエット（牧師・教育者のカルヴィン・ストウと結婚してハリエット・ストウ Harriet Beecher Stowe）の書いた『アンクル・トムの小屋』（*Uncle Tom's Cabin*, 1852年）は周知のように全国の奴隷解放運動に多大の影響を与え，かつまた19世紀に最も多くのアメリカ人に読まれた小説となる。家庭内で高度の教育を受けたキャサリンは23歳にして Hartford Female Seminary（コネチカット州）を創設し（今日，女性教育史上のマイルストーンと評されている），8人の教師を率いて若い女性の教育にあたった。11歳年下の妹ハリエットも生徒の一人である。彼女はセミナリーを父や弟たちが学んだイェール大学にひけをとらない高等教育機関にしたいと夢みて，カリキュラムに「女性科目」に加えラテン語，代数，幾何，化学，地理学，倫理学等を盛り込んだ。家族の転居によってキャサリンはこのセミナリーとの関係を絶ったが，次いでシンシナティにも同様のセミナリーを設立している。さらには「女学校での〝家事の経済〟（domestic economy）に他の科学と同じ場所を与えること」を目的に，1841年，自ら学生向けのテキスト *A Treatise on Domestic Economy* を書き上げた。同書は大きな評判を呼び，1856年までほぼ毎年増刷を重ねながらニューイングランド一帯の公立学校や女学校で（その続編 *The Domestic Receipt-Book* は全国的に）広く使用された上，次第に主婦層にも浸透していった。[4)] 今日しばしば，アメリカにおける家政学（home economics）誕生の指標ともされる。[5)] キャサリンは生涯独身で，ま

3）Introduction by Nicole Tonkovich, (pp.ix-xxxi.) なお，キャサリン・ビーチャーの本格的な伝記としては Kathryn Kish Sklar, *Catharine Beecher; A Study in American Domesticity*, 1973. がある。ほんらいこちらをベースにして経歴をまとめるべきなのかもしれないが，スクラーの書物はキャサリン（およびビーチャー家一族）の教育，宗教，道徳，健康，奴隷制等々きわめて広い範囲におよぶ波乱に富んだ活動を年代記ふうに追うことに主眼があり，その一方，私が読み込んでいこうという *The American Woman's Home* の内容にかんする記述はきわめて少ない。そんなこともあって，本稿ではスクラーの著述は部分的な利用にとどめることにした。

4）ibid., xiii. スクラーはこの *A Treatise* の画期性を次のようにおさえている。「1840年ころ，家事の技法について…書かれたものを参考にしようかという女性は，健康，子育て，家屋建築，料理，等をそれぞれ別々に扱った何冊もの本を読むか，そうでなければイギリスで書かれた概説書――それは諸論題を一つに集めてはいても，何人もの奉公人を使うことを前提にしているというふうに，アメリカの読者には適合しないものだったが――に頼らざるをえなかった。キャサリンの書物は，それぞれに異なる家事の仕事を一つにまとめ，アメリカの環境のなかでその機能を論じた，アメリカ最初の書物だったのである。」（Sklar, op. cit., pp. 151-152.）

5）アメリカにおける home economics の誕生と展開は後に詳述する予定であるが，キャサリン・ビーチャーの位置づけの見当をつけるのに，サラ・ステージによる次の記述をここに引用しておく。（Sarah Stage and Virglala B. Vincenti eds., *Rethinking Home Economics: Women and the History of a Profession*, 1997, pp.1-2.）「ホーム・エコノミクスを扱うほとんどの歴史家が，… 一般に三つのネガティブなフレームワークに応じてそれを扱ってきた。一つには，キャサリン・ビーチャーの仕事を強調し，ホーム・エコノミクスを19世紀の家事礼賛の一部または一組と判定したことによってであり，二つには，リリアン・ギルブレスやクリスチン・フレデリックの活動に焦点をおきホーム・エコノミクスと科学的管理法との関係を強調することによってであり，三つには，ベティ・フリーマンが *Feminine Mystique*（1963）を書

た自分の家というものを持たず，妹のストウ家をはじめ全国各地の兄弟姉妹，親戚や教え子のところに寄食しながら，教育と文筆で収入を得る生活を続けた。生涯を通じてキャサリンが心血を注いだのは女性教育であるが，そこからの広がりとして彼女の著述は，家事ハンドブック，クッキングブック，子育て，美容健康体操マニュアルなどまことに多方面に及ぶ。南北戦争をへて，ストウ家に寄食していた――妹一家の生計や育児を助けもしてきた――キャサリンが，かつて書いた評判のテキスト *A Treatise on* …のフレームをもとに，時代の進展に合わせて内容を書き換えあるいは書き加え，また近年キャサリンがとくに探求してきた女性の健康問題にかんする章などを新しく起こして，いわば家事にかかわる問題のすべてを集大成してハリエットとの共著に仕上げたのが，ここに取り上げる *The American Woman's Home* である。

すでに述べたように，19世紀中葉に家事にかんするハウツウ文書は市場に溢れていた。その中でキャサリン・ビーチャーの書物がかくまで名声を獲得し長く読み継がれることになった理由の核心を，女性史家トンコヴィチは次のように総括する。それは技術の急速な進歩，家庭に入る消費財の増加，内戦後のジェンダー行動の規範の変化などによって急迫していた，家事というもののジレンマを解決する書として読まれたからだと。同書はそれらの変化を積極的に受け入れながら，整頓され芳香が漂い子どもが健康に育つ家庭づくりをするという，課題と具体策を示した。「家族のための労働が，不十分にしかなされず，報われることも少なく，卑しく不名誉な仕事とみられている。」本書の目的は，家事労働を尊敬されるものに変えることだが，それは家内労働に金銭報酬を要求することによってではなく，専門性――法律家や医者や神学者と同じような専門性（profession）――を持たせることによって得られる尊敬なのだ。そうするためには家事を合理化せねばならず，そして科学的な原理に立脚しなければならない。冒頭にそう宣せられた。

同書は文字通り「家事の百科」であって，屋内の水道配管や腰掛式便器から縫製や育児まで，調理用レンジや宗教から絵画や額縁，高齢者介護までと，家庭内のあらゆる用具と行動にかんする助言を集大成している。どの章も具体的な助言に加えて，単調，退屈，乱雑になりがちな家事というものを合理化するために，社会的，科学的，愛国的，平等主義的な意味でのより大きなシステムに統合する方途が模索される。たとえばパンを焼くという主婦の行為は，それが化学の知識をもった主婦が自ら行いあるいはうまく女中に指示して行わせれば，もはや週ごとの暑く不快で厄介な課業ではなくなる。そのためには女性の科学と管理の習得が求められる。そしてそのような習得は，共和国の未来を担う夫や子に良い栄養を与える愛国的な行為でもあるというのである。[6)]

ここに描かれる主婦像からも窺えるように，同書が想定する読者の中心は何といっても中産階級の白人女性であった。その多くがプロテスタントで，日常の生計を賄うに十分の収入を得ており，洗濯や掃除や調理を女中が行うような家庭をも含んでいる。だが中には郊外の一軒家を買い取るのに頭金で半額を支払い，あとの半額を3年で完済しなければならないような家庭もある。どちらにせよ，そうした中産的な階層の主婦ほど，単に経済的な理由だけからでなしに古い家事のやり方の不合理を思い知らされることが多く，これまでのやり方に満足していないのである。ほかに，内戦が終わったばかりの

いて1950年代に作られた〝幸福な主婦ヒロイン〟像に挑戦した，そのことに深く影響されることによって，であった。」「歴史家によるホーム・エコノミクスの扱いにおおむね欠けていたのは，キャサリン・ビーチャーを頂点とするヴィクトリア期の家事論から20世紀初頭のエレン・リチャードが推進したホーム・エコノミクス運動までに，重要な展開があったのを理解しなかったことである。19-20世紀転換期に実践課題とされたホーム・エコノミクスは，女性のキャリアを論じるさい，家事におけるよりもジェンダーとプロフェッショナリズムの交差に光を当て，そこに焦点をおくようになったのであった。」

6）*The American Woman's Home*, xi.

不安に満ちた世情の中で，特に敗戦下の荒廃を乗りきろうとする南部の女性（少なからぬ寡婦や独身女性を含む），西部に移住し新生活の基盤を作ろうという家族の主婦などにも，家事の労働節約的にして内容豊かな運営は切実な課題だった。ビーチャーの書物はそこに，ニューイングランドの家事切り盛りのスタンダードを提示してみせた。

同書はまた，まともな学校教育を受けた独身女性がこれからどう生きるかにも，熱い声援を送った。キャサリン自身がそうであったように，家事における女性の役割や貢献は，必ずしも夫と自分の子どもを持つことを前提にせず，もっと多様な選択肢がある。たとえば結婚しないで，自分の財産と収入の道を確保した女性は，男に従属することなく自らの意思と権威のもとに――孤児を養子とし身寄りのない高齢者を受け入れヘルパーを雇い自分もいっしょに住まうような仕方で――家族というものを構築することができる。独身か既婚かを問わずすべての女性がそういう家族観のもとに訓練を身につけていけば，おのずから家族の中には愛による以外の，従属的な人間関係はなくなる。[7] 同書にはこのような突出した家族概念が提示され，したがってそこに「慈善」と呼ばれる女性の社会活動が，家事の重要な一環として位置づけられることになった。[8]

19世紀半ば以降に出現した公共サービスと消費財をいかに使うべきかの技法と考え方も，同書の内容の大きな部分をなす。都市住民の増加につれて市当局による水道，下水道，天然ガスの供給が進み，鉄道やフェリーやトロリーの発達と道路の改良に伴って郊外住宅が増えてきている。かつて貧窮者，アルコール中毒者，孤児，高齢者などの面倒見はコミュニティひいては家族の責任であったものが，今やソーシャル・サービスの範疇に移されて政府が引き受ける余地もでてきており，あらためてその中での慈善活動の意義と課題が提起されている。家庭内ではミシンを始め新製品が女性雑誌に続々紹介され，もはや家庭内で家具や用具を工作し，家畜を解体し，食糧を長期間保存し，石鹸や蠟燭やバターを作り，パンを焼くことが，不可欠の仕事ではなくなっている。子どもの病気にかんして母親は，医者と同様の知識を追求せずとも緊急事態への対処方法だけを身につけていれば，あとは本職の医者が診てくれる。そうした家事内容の変化のなかで，女性が主体的に追求し担うべき役割は何か，ということである。[9]

キャサリンは，家庭に入ってきた新しい消費財群を，家事労働軽減の手段とみただけでなく，それらを家族成員が所有し共同利用することによって，切り離され分散した家族が再統一される手段ともなり得るとみた。また西部への移住を強いられた家族の女性も，メールオーダーと東西間に敷かれた鉄道を利用して商品を東部か

7）*The American Woman's Home*, xx.

8）ここでもこうした発想にかんしての米英の類似と異同が気になるところではある。19世紀における慈善活動の提唱や取組みは，もちろんアメリカの専売特許ではない。たとえばイギリスにも各種の慈善を実践するおびただしい数の団体，協会が出現した（前掲『イギリス近現代女性史研究入門』206-220，223-234頁）。中には後述するビーチャーの構想に似て，貧困者のために集合住宅を買い取って提供し管理するような運動もあった（同238-249頁）。両国の運動が互いに影響しあったケースも少なくない。そうした共通性を認めた上で両国の違いをどう押さえるかという問題にはそう簡単に答えを出せないが，〈クリスチャンの白人女性が自らの意思で行った慈善活動〉というふうに限定すれば，アメリカの水準がはるかに高かったことは否定できないと思われる。慈善活動にかぎらず19世紀の女性の社会活動を米英で比較した研究では，全体としてアメリカが先行しかつ強力だったというのが通説といってよいだろうが，運動の課題を個別に取り上げてみると必ずしもそうでもない――アメリカの女性が反奴隷制，禁酒運動，各種のセツルメント運動などで特に重要な役割を演じたのにたいして，イギリスの女性活動はユートピア社会主義，反穀物条例，女性の雇用問題，社会科学，社会浄化キャンペーン等において相対的に重要な意義を有するという，各々の特性も見逃せない。（Christine Bolt, *The Women's Movements: in the United States and Britain from the 1790s to the 1920s*, 1993, pp.4-11, pp.55-61を参照。）ビーチャーの所論で最も特徴的なのは，そうした活動を一貫して家事労働の範疇で論じ推奨していることであろうが，そのことを「アメリカ的」とまで広げていってよいか，私には確言できない。

9）ibid., xxi.

ら取り寄せれば，東部の熟達した主婦のやり方や生活と張り合うことができる。これをさらにいえば，どのアメリカの家庭も同じ物を持つことで，地域や家族によるはなはだしい相違が緩和され，アメリカ人としてのアイデンテティが再建される。だがそうなるためには，そうした消費財を使いこなす女性が育たなければならない。[10)]

そのような女性の要件は三つである。第1に科学的知識。同書には熱や光の活用にかんして科学書からの引用を含めて理論的な解説が――熱伝動，熱の対流，放射，反射，通風調節，煙道…と――豊富に付され，料理にかんする章では身体の各部位の機能や物質代謝の解説が大きな比重を占め，裁縫にかんする章でさえ何十もの専門用語が登場する。つまり裁縫はそれだけ専門性を含んだ仕事だという視点から書かれている。第2に良識（コモン・センス）。スコットランド啓蒙主義の道徳哲学を学んだ父ライマンのもとで娘たちもその倫理観を至上のものとして継承した。人間は共感（シンパシー）――共有する道徳と市民的文化――の働きを通じて相互の関係を形成し，共通の嗜好を身につける。たとえば居間に名画の複製を飾ることも，住人の洗練された嗜好とアメリカ人としてのアイデンテティを示すとともに，そうした文化を子どもたちに引き継がせる教育の一環でもあるのだ。家具をきちんと磨かない女中には，単に怠けているのでなく，そのような嗜好にまだ至っていないからだと考えて教育しなければならない。子どもにも女中にも，そうして躾けていくのがクリスチャンの女性の任務である。そこで第3に宗教。同書にはイデオロギー的にも，またもっと直接，具体的な間取り，造作や日々の時間配分等にいたるまで，ピューリタンの理念が充満している。そのことはまた，主婦にとっての家事労働を「課業 task」ではない「聖職 ministry」だと説き，あるいはまた妻が夫に子が父親に従属するのを同書が当然視あるいは少なくとも「黙認」するもとにもなっている。[11)]

結論的にトンコヴィチは，所詮つぎはぎ細工（パッチワーク）の構成で，そこにおそろしく保守的な見解と真性の革命的な提案とが同居していることを，本書の特色としている。一貫した構成を欠くことが内容の決定的な欠陥を曖昧にして押し隠している一方，「家族状態の多くの困難や神聖な義務に耐えるすべての仕事にたいして，それに与えられる栄誉と報償を高める」という冒頭の約束を，充たすことにもなっていない。キャサリンは（ハリエットも）主婦としての仕事の故ではなく事業家としての明敏性，家事実践の理論家としての熟練度で名声を獲得した。彼らの記述にあるようなファンタスティックな家事の世界に生きている女性はいない。著者が説くような報償を実際には受けとることのない女性たちによって，この書物は購入され読まれ適用されたのだ。それは家事の快適性をアピールし，その過程を合理化する道を拓いたけれども，家事労働の「栄誉と報償を高める」ことはできなかった，と。[12)]

(2) *The American Woman's Home*

ニコール・トンコヴィチによる解題をふまえて，キャサリン（あるいはビーチャー姉妹）の書物の内容を読み進んでいこう。まず同書の章立ては次のようである。

序
1，クリスチャンの家族
2，クリスチャンの住宅
3，健康によい家
4，屋内の科学的な換気
5，ストーブ，暖炉，煙突

10) ibid., xxii-xxiii. ただしトンコヴィチはここで，キャサリンの平等観，アイデンテティが，人種，社会階級の相違にまったく視点を及ぼしていないと指摘している。

11) ibids., xxiv-xxvi.

12) ついでに，スクラー（K. K. Sklar）による，キャサリンへの総合評価は次のようなものである。「……キャサリンのライフワークの多くは，19世紀初期の女性の間に高まった期待が，その後の社会的，政治的，経済的な現実からますます遠ざけられてきた，そのギャップに橋渡しをしたものと見ることができる。」（op. cit., p.193）

6，屋内の装飾
7，健康管理
8，身体の鍛錬
9，健康な食べ物
10，健康な飲み物
11，身体の清潔
12，衣服
13，上手な調理
14，早起き
15，家庭内の礼儀作法
16，家事はいつも機嫌よく
17，システム化と規律の習慣
18，慈善を施す
19，時間と出費の経済性
20，心の健康
21，乳児の世話
22，子供のしつけ
23，家庭の娯楽と社会的義務
24，年寄りの世話
25，女中・奉公人との関係
26，病人の看護
27，応急手当と解毒法
28，裁縫，裁断，繕い
29，熱と灯り
30，快適な部屋づくり
31，庭と菜園の手入れ
32，園芸植物の増やし方
33，果樹の栽培
34，動物の飼育
35，腰掛式土かけ便器
36，暖房と換気
37，ホームレス，ヘルプレス，不品行の人々に向けてできること
38，クリスチャンにとっての隣人

序において述べられる本書の目的は，上の解題からほぼ理解できるのであるが，ここでは本文にそくして冒頭部分を訳出（抄訳）しておく。[13)]

本書の著者は，女性が，その性のゆえに被るさまざまな不利と受難を切り抜けようとしているあらゆる真摯な努力に敬意を払う一方，そうした災禍の主要な原因が，家族の状態の栄誉と諸々の義務に十分な評価が下されていない事実，それらの義務に携わる女性が男性の職業や専門性のために受けると同様の訓練を受けていない事実，そしてその結果として家族のための労働が，不十分にしかなされず，報われることも少なく，卑しく不名誉なこととみられている事実，にあることを確信している。

幼い子どもの保母であり，一家の調理人，家政婦などであることは，貧乏がもたらす最低かつ最後の帰結であって，教養と地位のある女性ならば社会的な身分や体面を失うことなしにそんなことはできないと，みなされている。

本書の目的は，家族の状態にかんする多くの困難と神聖な義務に耐える取組みすべての栄誉と報償を引き上げること，女性が真の専門性を発揮するどの部門にも男性が最も高い専門性に向かうと同じ憧れや尊敬を付与すること，である。

男性たちが法律，医学，神学などの訓練を受けるときに，彼らは十分な資金の寄贈を受けた諸機関，最高の技能や学識を有する教師陣，多量の書籍を擁する図書館，膨大かつ高価な用具類を享受できる。そうした優位な場で彼らは，人生における10年ほどもの期間，専門性を身につけるために没頭するのである。…

女性たちの専門性とは，子どもが幼いとか病気だとかいう決定的な時期に介抱や保育をする，最も感受性に満ちた子ども期に高い人間性を涵養する，奉公人を訓練し監督する，そして家族の状態の統御と経済のほとんどを掌る，といった内容のことである。これら女性の義務は，男性に課せられたいかなる義務に劣らず神聖かつ重要なものである。だがそれを身につけることのすばらしさは女性に伝えられてこなかったし，一人の女性がその専門性のために適切な訓練を与えられることを社会が保証するといった，きちんとした制度

13) *The American Woman's Home*, op. cit., pp.19-20.

のしくみもない。

この不幸への対処の必要と，そしてこれまでこのような問題にかんして論じてきたこともある本書の二人の筆者が家事の適性にかんしてしばしば発した問いとが，女性の家事の義務の教師としての重要な役目を通じて二人が積み重ねてきた成果の内容を伝えようと，考えさせるにいたった。…

序ではこの後，著者たちが家事の問題にかんしてこれまでどのような活動と執筆を行ってきたかをたどり，その上で本書は，「時代の進展と，いっそう開花したキリスト教の教義を踏まえ，本書の著者が，女性の真の使命 —— 彼女の固有の義務の尊厳と重要性，この使命の正しい理解がもたらす真の幸福，これら諸義務の適切な達成 —— にかんして得たより高い見地」から，包括的にかつ新しく書かれたことが宣せられている。

第1章，クリスチャンの家庭（pp.23-26）。

この表題を冒頭に据えたことに，著者の家族・家事論の原点の意図がこめられている。また当時，進取の気性に富んだ革新的な女性こそが最も明快に「男は外，女は内」論を掲げ，まさにその「女は内」の場所から女の社会とのかかわり，女の社会的行動を促したのに，キリスト教が —— 独立革命＝建国期の「共和国の母」論に続くステップとして —— 決定的な役割を演じたことを，示唆してもいる。

ここでビーチャーが繰り返し強調するのは，家庭こそ神が望む「自己を犠牲にして行う労働」(self-sacrificing labor) の拠点だということである。男は家族のために土地を耕し，工場で汗を流し，航海に出，家を建て，商品を売買し，公務に携わる。そうした労働のために一日の時間のほとんどを家の外にいるが，それは彼自身の家を維持する父親としての自己犠牲労働のゆえなのである。女は家庭のいわば聖職者であって，もともと個々には無知で弱い家族成員すべてを自己犠牲を厭わぬ者に鍛えるため無私の奉仕 (self-denial) をするための中心人物である。手がかかる幼い子には，夫婦が対等の立場で協力して面倒をみる。子どもが大きくなるにつれて，その子が弟や妹の面倒をみるようになる。誰かが病気になると皆が自己を犠牲にして面倒をみる。両親が高齢になると，子どもたちが自己犠牲的な奉仕者になる。こうした家族成員それぞれの自己犠牲によって，神に祝福される子どもが育ち，よい家庭が築かれる。

ここで「無知で弱い」成員に自己犠牲の精神を植え付け鍛える女性の使命とは，自分の実子に向けてだけ行使されるものでない。「生計を立てることのできるすべての女性は —— どんな女性もそのように訓練されるべきなのだが —— 適切に組織された女性の団体に所属しあるいは自分の家族をつくりあげる仕方で，孤児，病人，ホームレス，罪人たちを神の恩寵のもとに迎え入れることができ，母親としての献身によって，彼らをキリストの無私の行いに続くよう訓練を施し，地上にいるキリストの子どもすべてに，生活の真の幸せと永遠のホームに住まうための教育をなすことができる。」

もう一つキリスト教から説かれる徳性は，実際に身体を使って行う勤労の意義と結びつけられている。この点で，市民法や社会習慣の多くがキリストの教えに反しているとビーチャーはいう。高等教育を受け裕福で高い地位にいる人々は，自らの手を使って労働をしない。肉体労働は無知で貧しい人が行う不名誉で下品な仕事だということになっており，わずかの収入しか与えられない。キリストが大工の子として生まれ，3年未満の伝道活動に先立ち30年もの手労働に従事したことの意味が忘れられている。富裕者が家族状態の真の目的に反するようになる一つの道筋は，健康，慰め，優美さなどに最も重要である手労働を社会の最下層の手に委ね，最下層の人々を引き上げる努力を怠り，家庭では自分と同じように手労働を馬鹿にする子どもを育てていく，そうした生活スタイルにあるのだ。子どもにたいして「レディであれ」ということが「働かないで」というのと同義になっている。そのような通念を打ち破ることが著者の切なる願いなのだ，とビーチャーはこの最初の章を結んでいる。

第2章，クリスチャンの住宅（pp.27-41）。

ページ数の多い章の一つであるとともに，今日まで家事労働にかんする論説で最も引用され

る頻度の高い章である。ここには21の図が配され，著者が推奨する2階建（プラス地下室）独立家屋の間取りや造作が解説されている。この住宅設計の根底をなすのは，過剰・不要な華美を排し「労働と時間と出費とが倹約できる家」という考えである。[14)]

主な特徴点だけ抜き出してみよう。まず第1図が1階の間取りである。総面積ほぼ100 m²と，それほど大きなフロアではない。玄関を入ると左右に部屋があり，右が居間（drawing room）であるが，左はいわば多目的室である。左の部屋には可動式のスクリーンがあり，それを移動することで部屋をさらに2分し，たとえば一方を寝室，他方を別の居間（parlor, sitting room, breakfast room, sewing or retiring-room 等と表現）として利用することができる。スクリーンの寝室側には棚や引出しや洋服掛けがついており，これは箪笥や棚を家具として別誂えするよりずっと安く済むし使い勝手もよい。寝室とする部屋には大小二つの寝台（coach）が通常は重なり一つになって置いてあり，必要に応じて二つに分ける。玄関からクローゼット等で仕切られた奥が，台所（kitchen）とかまどの部屋（stove room）で，両者は熱や臭いを遮断するためスライド式のドアで仕切られている。台所は窓が二つあって適度に明るく，さまざまの台所用具と食材がきちんと収納され，流し場には井戸からと雨水のタンクからとの二つのポンプがついている。雨水のほうは手動式の押上げポンプで2階天井のタンクに水をため，そこから水洗便所（water closet）と浴室（bath room）に水を供給する。ほかにこの1階には2つの温室（conservatory）が設置されており，冬にも種を蒔いて花や野菜を育てることができる。この仕事を子どもにやらせ，さらに作物を売ったり施したりすることで，経済と慈善の観念を涵養するのに絶大な効用を発揮する。

〔補〕1階の間取りの中の台所部分について，ビーチャーの提言がどういう新しさをもっていたのか，他の文献からの引用を加えておく。それは生活史を機械化の面からたどった比類なき名著，S. ギーディオンの『機械化の文明史』からのものである。[15)] 同書第Ⅵ部「機械化が家事におよぶ」の第2章「作業過程の組織化」でギーディオンは，家事における作業過程の組織化は「1860年代末に始まる」として，ビーチャーの台所のレイアウトの説明から書き起しているのである。すなわち，

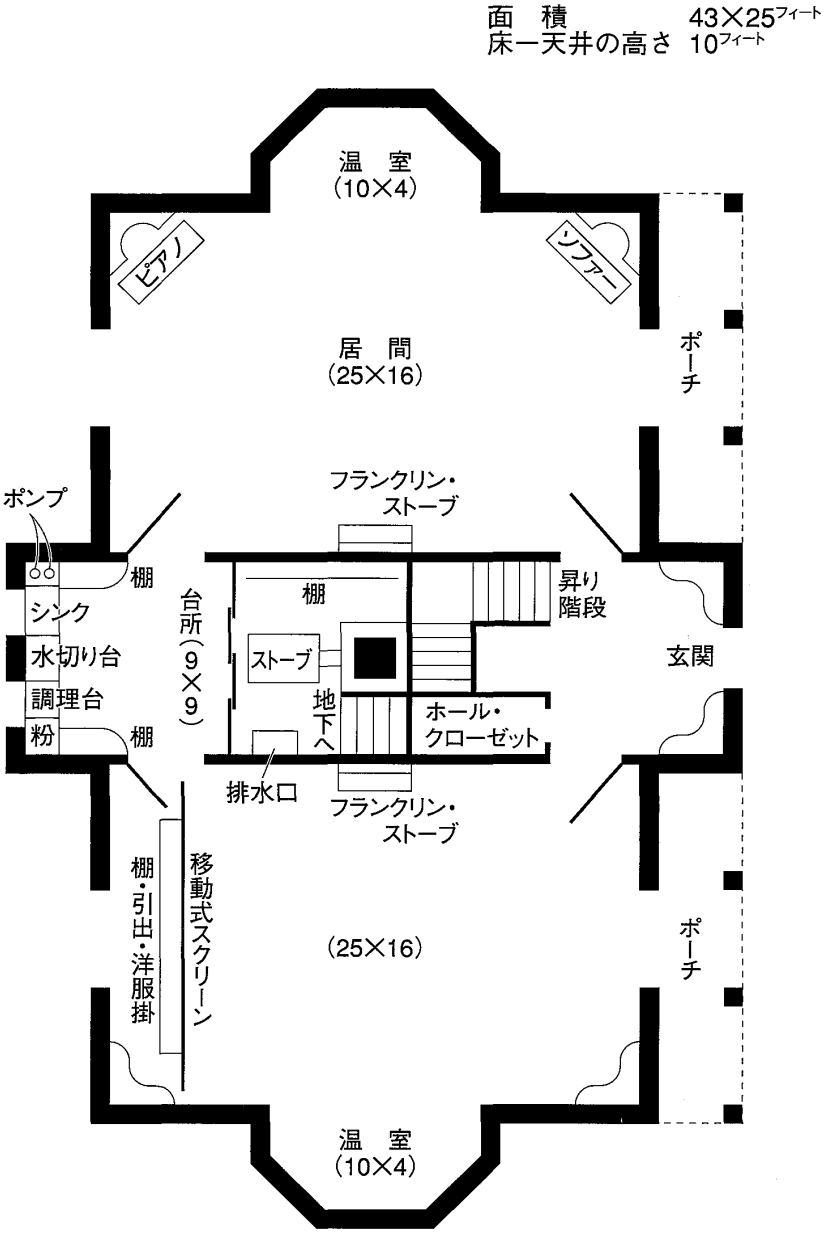
「作業過程の組織化と機械器具の使用，この二つを混同してはならない。…家事の計画化は家事の機械化以前に始まっていた。したがって機械設備が普及し始めた時にはすでに，それを組み込む科学的な家事管理の体制はできあがっていたということである。…キャサリン・ビーチャーはこうした傾向の本質をはっきりつかんでいた。…建築家が1920年以降，よく計画された台所の重要性に気づき始めたとき，彼らは食堂車の調理室を原型として利用した。しかしキャサリン・ビーチャーが本を著した時点では，このような原型は存在していなかった。（ビーチャーは）〝…料理の材料と調理用具，流し台と食堂との間は距離が離れすぎていて，時間と労力の半分は，器具を集めたり戻したりするための往き来に費やされてしまう〟と述べている。」

「まずそこで気づかれることは，大きなテーブルや独立した戸棚が台所から姿を消しているという点である。テーブルの代りに小ぢんまりとして調理台が窓の下にひろがっている。食器戸棚の代り

14) ドロレス・ハイデンによると，ビーチャーが1841年に *A Treatise on Domestic Economy* を書いたさい彼女が提示したモデル住宅は暖炉を中心とする箱のような建物で，まことに素っ気ないものであった。その後の猛勉強で技術的な知識とデザインの技法を磨き，1865年までに完成度の高い住宅設計ができるようになったという。(Dolores Hayden, *The Grand Domestic Revolution*, 1981, p.57. なお同書には野口・藤原訳『家事大革命』があるが，訳書が手元にないので原書のページ数のみ記す。) スクラーのビーチャー伝では，こうした側面でキャサリンが身につけていった進歩があまり考慮されていないように見える。

15) Siegfried Girdion, *Mechanization Takes Command: a contribution to anonymous history*, 1948, (renewed edition 1975) 栄久庵祥二訳『機械化の文明史』1977年。

第1図　1階間取り



に，棚，抽出し，収納部分が調理台の下に配置されている。

今日の機械化された台所には，三つの作業中心――収納と保存，洗いと下準備，調理と配膳――がある。このうち二つ，収納―保存，調理―配膳の機能を，1869年の時点でビーチャーははっきり区別し，それぞれを一つの単位として扱った。…それと同時に，用具とその使用場面が一つに結びつけられた。…彼女の考案した調理台は，採光もよく，必要以上に大きくもない。調理台の左側には，小麦粉が入っている戸棚の大きな蓋が同じレベルで隣接し，両者は腰の高さで一つの面を構成していた。主婦は，ただその蓋をあけて隣の〝パンこね台〟に粉をまけばよかった。当時，ヨーロッパとは異なり，アメリカの主婦はパンを依然として家庭で焼くことを習慣にしていた。…したがって，当然，全麦パンや大麦パンに使う大麦や粗い小麦粉をいれておく抽出しは，作業台の下に取り付けられた。さらにその下には，ほかの料理の材料を入れておく抽出しが付いていたが，その位置はあまり便利な位置にあるとは言えなかった。

〝パンをこねる〟台をひっくり返せば，肉や野菜の下準備する場所になった。その隣の〝皿の水切り台〟はヒンジでとめられており，下準備用の台

(〝クック・フォーム〟とビーチャーは名付けている)の上に置くこともできたし，ひっくり返せば，流しの蓋にもなった。

これは1869年に考えられたもので，まだ水道管が敷設されていない時代のことであった。そのため，キャサリン・ビーチャーは，流し台の近くに〝井戸用・雨水用の二つのポンプ〟を取り付け，自分なりの水道を工夫している。

〝流し台の幅は，クック・フォームとうまく合致している〟と彼女ははっきり述べている。こうして収納部分と，調理や洗いものをする部分が一ヵ所に集められた。これらの点に関する彼女の工夫は，1910年の水準のはるか上をいくものだった。1910年の時点でも，まだ，テーブル，戸棚，レンジは，それぞれ独立した単位として横に並べて配置されていたからである。

夏期の蒸し暑さや台所から出る臭気のことを考えて，キャサリン・ビーチャーはレンジを台所の中で離れた場所に置き，下準備をする空間とはガラスの引き戸で仕切った。」[16]

続いて，第2図が2階の間取りである。二つの寝室に分かれるが，いずれも3角屋根の下の屋根裏部屋(garret)なので両端のクローゼットの高さは天井よりうんと低い。高価な寝室用箪笥の代わりに部屋の角々にドレッシング・テーブルがある。階段を昇りきったところには浴室(bath-room)と水洗便所(water-closet)がある。とくに水洗便所は近年に改良が進んで水処理のトラブルがなくなり，おかげで屋外に別建てされた便所に較べて不愉快な労働の大いなる軽減をもたらしている。[17] 二つの寝室にはバルコニーに向けて大きなガラス戸がついている。またクローゼットのドアには，靴が一足ずつそして合計数足入る袋(shoe-bag)と，第3図のように糸，ボタン，リボン，古布の端切れ，新しい布等々が分類して入れられている品物入れ(piece-bag)が掛けられている。著者によればこれは労働とスペースを大幅に節約し，これを探す時間とトラブルをなくし，また引出しやトランクなどよりずっと安くつく「発明品」である。

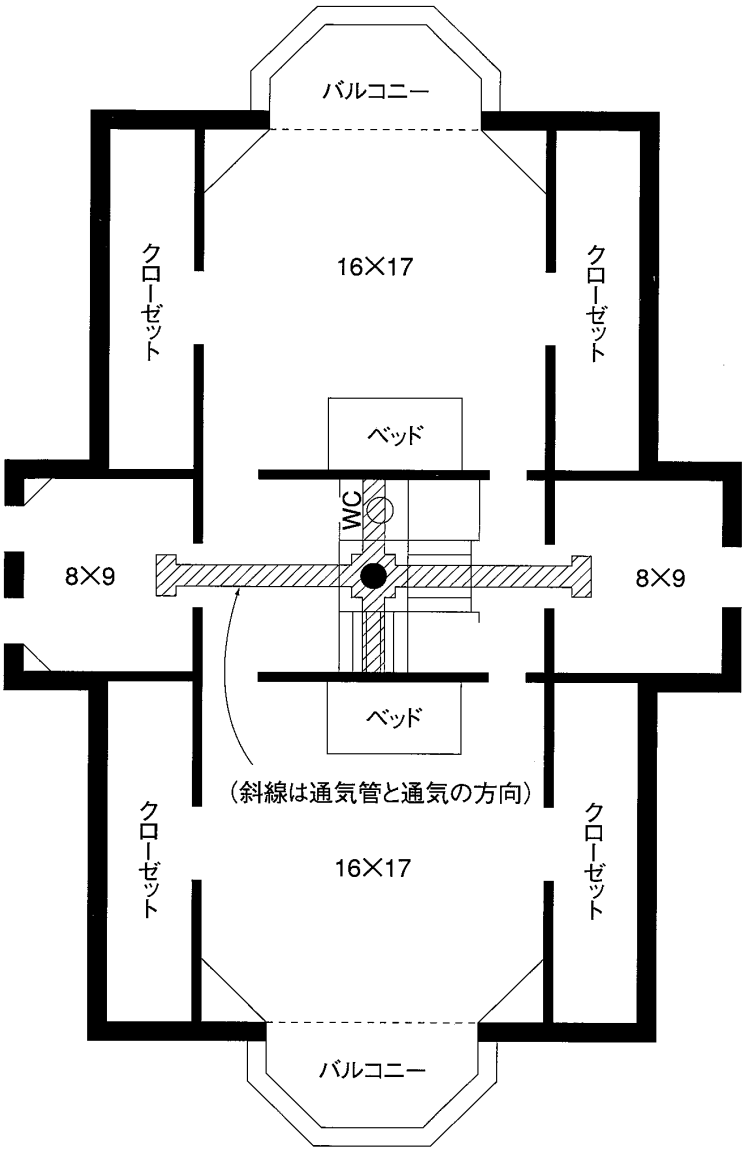
第4図は地下室である。床と壁は漆喰で固められ，ガラス付きドアから明かりをとる。床は全体がやや傾斜していて水が排水溝に集まるようになっている。冷蔵ボックスが置かれるか，外気を遮断する冷蔵スペース(アイス・クロゼット)が特別に設えられている。

〔補〕家庭における当時の冷蔵施設のレベルと普及の程度について，他の文献から加筆しておく。R. S. テドローによれば，「合衆国では家庭用冷蔵庫への関心の高まりは，19世紀のはじめにさかのぼる。トーマス・ムーアというメリーランド州のある農民が，バターを市場に運搬したり売れるまで保蔵

16) ibid., 516-519. 邦訳499-501頁。なおイギリスを中心に台所の歴史を書いたモリー・ハリソン(Molly Harrison, *The Kitchen in History*, 1972. 小林祐子訳『台所の文化史』1993年)は，アメリカにかんして「1869年にアメリカの家事改革家キャサリン・ビーチャーが〝アメリカ婦人の家庭読本〟という革新的な本を出した。この中で台所サービスに対するいくつかの提案を行っているが，100年たった今も現代的な響きをもつ。ビーチャーは，台所は一家の中心的存在であり，一連の家事サービスを統一する場であり，他の部屋はその周辺に配置されるべきだという考えを初めて打ち出した。彼女の言う家庭はまさに〝生活するための機械装置〟(machine for living-in)であった。」と書いている(邦訳229-230頁)。ハリソンがこの台所の設計にかんしてとくに強調する一つは，(ギーディオンの注目点と同じく)食材・調理器具・食堂などの距離を近接させ有機的に構成していることであるが，ほかにもう一つ「すべての所帯道具には，種類別に作り付けの収納場所があるべきだと考えており，食器戸棚，棚，引き出し，調理台に対し規格寸法の必要すら予見している。彼女の収納空間設計の一部は，キャスター付きの食器戸棚の中まで及んでいる。キャスター付きの戸棚は自由に移動させて衝立や間仕切りにすることもできる。」ということを書いている。だがこのキャスター付き戸棚というのは，本書だけのことでいえば(本稿で説明したように)多目的な部屋の洋服掛けや衣類用引出しなどのことであって，台所の話ではない。

17) このように一戸建住宅では水洗便所が最新式のものとして普及しつつあったが，所得がもっと低い都会の共同住宅などで，水の代わりに土をかける腰掛式便器earth closetも一部導入されていた。そうした経済的な意味を越えて1860年代と70年代に，この土かけ便所こそ将来の理想的な便所だと推奨する動きがあり，ビーチャーもかなり共感をもって受け入れた。そのため本書で独立の章(第35章)をたてて検討している。

第2図　2階間取り

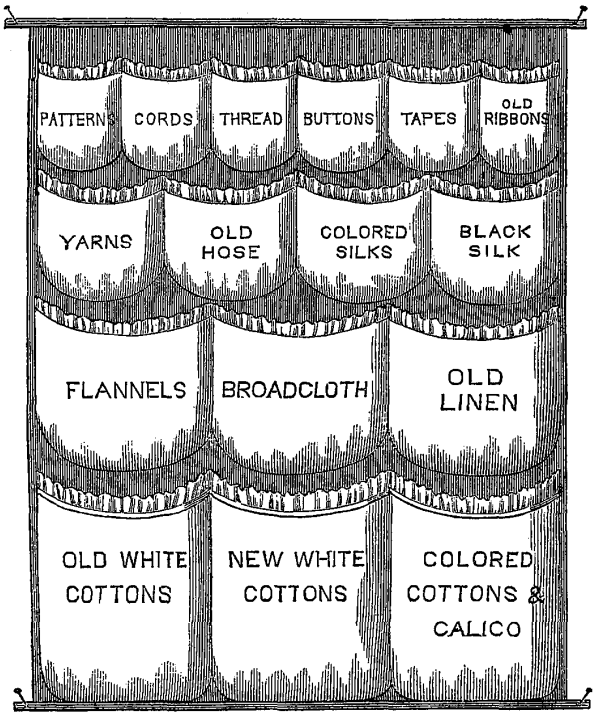


したりできるように発明したのが，冷蔵庫の始まりであった。この冷蔵庫はシーダー材でできた卵型の桶で，その中に氷に取り巻かれた金属の容器が入っていた。」そのようなアイスボックスのための家庭内氷需要が南北戦争後に急増して一般家庭に普及していったという。[18)]

スーザン・ストラッサーの著作 *Never Done* については別の章で詳述するが，ここで家庭用冷蔵庫の，それもビーチャーに関連している叙述だけを抜き出して訳出しておく。「…最初のアイスボックスのパテントは1803年に遡るが，氷の値が高くてアイスボックスは1827年まで例外的でしかなかった。この年，アイスカッターと，氷が溶ける度合いを劇的に減らした新しいアイスハウスという二つの発明があって，氷の価格は60%以上も低減した。天然氷を採取し貯蔵し輸送するのが大きな産業として育ってきた。…家庭用の冷蔵庫が広く広告されるようになり，19世紀半ばまでには都会で規則的な氷の配達を利用できるようになったが，それでも人口比での氷の消費はまだ低かった。家庭でのアイスボックスはごく稀だった。料理本や家事マニュアルがしばしば冷蔵庫の使用を勧め，それを持ったことのない家族に氷の保存法を教唆した。…キャサリン・ビーチャーは…1846年，

18) R. S. Tedlow, *New and Improved, The Story of Mass Marketing in America*, 1990. 近藤文男監訳『マス・マーケティング史』1993年，366-367頁。

第3図 ピース・バッグ



安い樽を転用して，販売されている〝性能高い〟冷蔵庫の代用に使う術を公表した。23年後の1869年にも冷蔵庫はまだひじょうに稀だったので，ビーチャーはThe American Woman's Homeで詳しい解説を行った。地下室で冷肉やクリームを保つのに針金あるいはスズ製のクローゼットに加えて，彼女は〝冷蔵庫かスズあるいは亜鉛で裏打ちした数フィートの大きな木箱――木部とスズの間に木炭の粉末を詰め，底に氷を敷きつめ，水抜き管，棚と仕切りをつけたもの。この中で食材が冷蔵される――〟しくみを提唱した。この1869年時点まで，中産階級であるキャサリン・ビーチャーの読者たちでさえ，冷蔵庫とは何であるかを知らなかった可能性がある。」[19]

氷を買うのと別に，自宅で氷そのものを製造する装置のついた家庭用冷蔵庫の先駆が1860年にFerdinand Carréによって発明されたが，複雑にすぎ効率も悪くて，19世紀にはまったく普及をみなかった。[20]

洗濯場の水桶には天井裏からの冷水あるいはストーブから温水を導入しそして排水するためのプラグ，コック，パイプなどが装置されており，これが主婦の従来の重労働を大いに軽減する。洗濯場のストーブというのは，やかんで湯を沸かし，またアイロンを熱するためのものである。濡れた状態の洗濯物は棚に分類され，ついで干すためにクローゼットに移される。このしくみが時間と金の節約だけでなく健康にも役立ち，洗濯物は外で乾かしたのと同じように白く仕上がる。[21]

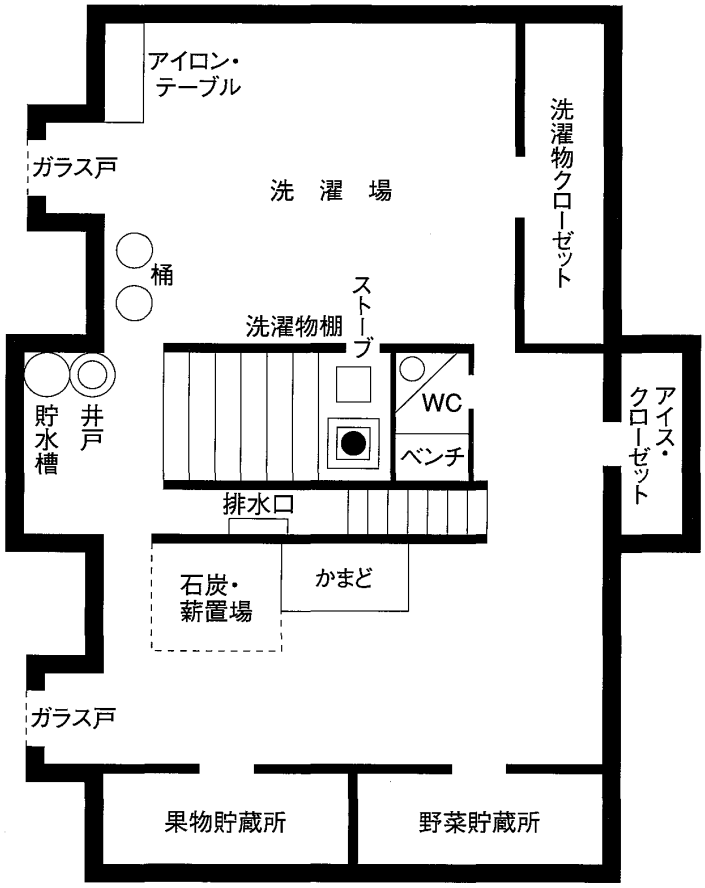
で，これだけの設備をもたせて家屋を建設した場合，どれだけの資金がかかるかを大工に試算させたところ，1600ドルという積算がで

19) Susan Strasser, *Never Done: A History of American Housework*, 1982, pp.20-21.

20) Giedion, op. cit., p.601, 邦訳572頁。

21) 洗濯をする洗濯機については，ここではパイプやコックのついた桶（tubs）という以上に何の説明もない。ギーディオンは次のように言っている。「1869年には，洗濯機の特許件数は2000近くにものぼっていたため，キャサリン・ビーチャーは特定の洗濯機を支持することはせず，50年代のイギリスやフランスの勤労者階級の間での成功にならって，12世帯で1台の洗濯機を共有することを提案した。」(Giedion, op. cit., pp. 566-567, 邦訳543頁。ギーディオンがビーチャーから引用しているのは次の箇所である。「洗濯とアイロン

第4図　地階レイアウト



た。[22] この資金を一挙に調達できない家族の場合，たとえば小規模な2家族が同居するとか，あるいは大部屋や寝室の一方を完成させないでおいて，家族が増えてから手を加える方法もあると，著者は述べている。さらにこの住宅の周辺に家畜小屋，菜園，果樹園などを持ち，奉公人などなしに両親と子どもが協力して働く状態が作れれば，これはもう金持ち階級の中では滅多に見られない，健康と快適性と倹約が達成されるであろうとも。

第3章，健康によい家（pp.42-52）および第4章，屋内の科学的な換気（pp.53-57）

第3章で取り上げられているのはもっぱら屋内に清潔な空気を保つ課題であるので，第4章と一緒に要約する。まず第3章の前半，心臓や肺の図解をしながら人体にとって新鮮な空気の吸入がいかに重要かが説かれる。家中に大きな暖炉（open fireplace）ひとつしかなかったかつての住宅構造では，顔を火に向けても背中は寒く，桶の水が凍りつき，ベッドの毛布も息の吹きかかる部分が凍るような不便はあったもの

掛けの日をカレンダーから削除できたら，アメリカの主婦にとって家事はどんなにか楽になることだろう。…近所に共同の洗濯場ができれば，アメリカの主婦にとって最も困難な問題の解決に大きくプラスすることだろう。」（*The American Woman's Home*, p.246. ただし訳文はギーディオンの翻訳書による。）なおビーチャーのこの文章にかんしては，ギーディオンとニュアンスの違う読み方がありうる。本稿で後の第25章の内容紹介の際に付す注33を参照。

22）本書に描かれた各室内の造作や家具の中には，職人の手を借りずに素人大工で作れるものも少なくない。著者は1階の可動式スクリーンを始め棚や洗面台など，息子や夫が鉋や鋸を使って自作すれば材料費だけでうんと安く済むと書いている。男がこういうかたちで家事に立ち入るとかそのことに価値があるとする考えは，19世紀の中産階級の家庭にかんしては突出した例外的な発想だったようである。（Steven M. Gelber, "Do-It-Yourself: Constructing, Repairing, and Maintaining Domestic Masculinity", L. M. Hawes and E. I. Nybakken eds., *Family & Society in American Family*, 2001, p.269.

の，そのぶん屋内に今日よりも清潔な空気が保証されていた。それにたいして今日の住宅では，機密性が高まったゆえに空気がうんと悪くなっている。その健康上の悪影響は，家の中にいる時間が多い女性と幼児を筆頭に，きわめて深刻である。さる高名な医者が本書の著者に宛てて，「住宅の換気というテーマは今日の最も重要な問題の一つです。どれほど多くの人々が，換気の必要性を主要な要因とした緩やかな自殺行為，殺人行為の犠牲になっていることでしょう」と書いた。といって，たとえば真冬に窓やドアを開けて行う換気は別な意味で健康にも良くないし，室内の熱をただ逃がすのは経済的に大きな無駄である。とくに夜の密閉された部屋で緩やかな換気を維持するのは難問題なのであるが，そうしたことにかんする教育はこれまで何もなく，多くの人があまりに無関心である。

こう述べたあと第4章は最後に「有効な換気策」のいくつかを紹介している。いずれもが，室内に冷たい外気を導入する送気管と，その冷たい空気を直接室内に放出しないでストーブの煙突などとの接触で暖められてから部屋に送り込む送気管との組み合わせからなっている。原理的には今日の機密住宅の換気装置と共通していると考えられる。当時は，鉱山や化学工場の換気装置などを応用しながらその技術が開発され始めたばかりで，それにかんする特許の出願数も少なくはなかったようである。[23)]

第5章，ストーブ，暖炉，煙突（pp.58-70）

「もしアメリカのすべての主婦が，最も経済的でかつ便利な調理と暖房のための道具をどうやって選ぶのか教えられるものなら，無知と無関心から生ずるおそろしいほどの無駄がなくなるであろう。すべての女性は，熱にかんする科学的な原理とそれを実際の目的に適用する仕方を教えられるべきである。……」この章はこう書きだされ，したがってまず，熱伝導，対流，放射作用，反射熱など用語解説のかたちで熱の科学が語られる。直接かまどの炎の上で煮炊きをしその炎で暖をとったかつてのオープン・ファイヤー方式はたしかに時間，労働，支出いずれの面でも無駄の多い方式であったが，それに代って1830年代ころから製造され家庭に徐々に普及してきた鋳鉄製のストーブやレンジにも，幾多の難点――熱効率が低く経済性に劣る，火に近寄らなければならない危険性，夜の就寝時の持続性がない，薪と石炭両方の利用性が悪い，冬と夏の使い分けの難しさ，そして空気の汚染による健康上の問題等――がある。さらに同じレンジにも機器によって，熱のコントロールの容易さ，耐久性，湯沸しや食事の保温ができる付属設備等，さまざまな面での差がある。そうした指摘を行ったうえで著者は最も推奨できるストーブを，具体的に特定し図示し解説している。客観的にいえばここで特定されているストーブは，今日から振り返った家庭暖房機器の歴史の中で，おそらくさして重要な意味をもっていない。ギーディオンもいうように19世紀の中ごろ，「アメリカほどいろいろな種類の鉄製ストーブや，レンジを製造した国はない。……後の自動車のように，当時鋳物のストーブはアメリカの象徴といって過言でない」[24)]状態で，洗濯機に増しておびただしい特許がしのぎを削っていた。技術は日進月歩だったが，本書

23）家屋の換気の悪さをビーチャーは"household murder"と表現し，本書でもいくつもの章にわたって繰り返し論じている。一日中，換気に配慮することを母親，妻の中心的な義務だとさえ説く（S. Strasser, op. cit., p.57）。第36章がその論旨の最後のまとめである。

24）Giedion, op. cit., p.528, 邦訳508頁。なおビーチャーの説く家全体の暖房の設計にかんして，スーザン・ストラッサーは次のように言っている。「キャサリン・ビーチャーが1869年，同時代の中産階級に向けて提示した理想的な家屋プランでは，地下のかまど，フランクリン・ストーブ，キッチンの調理用レンジが組み合わさった，熱対流と換気のシステムにもとづくセントラル・ヒーティングになっている。ビーチャーは湯と蒸気の熱による暖房がより健康に良いと信じたが，しかしラジエーターの設置にはカネがかかりすぎた。ビーチャーのこのプランでさえ，まだ暖炉と個々のストーブで暖をとっていた彼女の読者たちの現実の描写ではなかった。…ビーチャーがもっと早く1841年の著書Treatise on Domestic Economyで描いたプランでは，まだストーブさえなくて，…そこで彼女は家の中心部に煙突を配するように提言している。」（S. Strasser, op. cit., pp.53-54.）

の著者は，たとえば推奨するこのストーブの優れた耐久性（したがって経済性）の証拠として，自分はこれを18年から20年も使い続けているいくつかの家庭を知っていると書いている。もちろん著者が当時のストーブ技術の変化を知らなかったわけではないが，それを知りつつなおかつ自分が推奨するストーブに相当の自信をもっていたようである。[25)]

第6章，室内の装飾（pp.71-84）

快適な居住環境にとって，室内のデコレーションという要素がいかに重要か，それがまた家族成員のモラルの高揚，子どもの成長に不可欠かがテーマである。カーペット，マット，カーテン，家具類，壁紙，絵画や額縁等の選択にさいして高価なものでなしに色調などハーモニーの必要，穴の開いた鍋や壊れた塩壷を植物を育てる鉢に変えるといったリサイクルの知恵，子どもといっしょに森にでかけ木の根を採取しフラワー・スタンドに工作したりする教育効果，テーブルの上に木枠を組立てガラスを張って温室を作り冬にも植物の生育を楽しむ術，等々が熱をこめて説かれる。再三強調されるのが，そうした豊かな居住環境の創出がけっして家計の経済状態に依存するのでなく家族成員の美観や知恵に依存するということ，そしてそうした美観や知恵を子どもに伝え習得させなければならないということである。

第7章，健康管理（pp.85-90）

主婦が担う責任のうちでも家族の健康にかんすることほど重要なものはない。ところが若い女性の多くは，この問題にかんする知識も経験もまったく乏しい。ではそれにたいしてどうすればよいかについて，じつは真に有効な準備というものはないのだと，著者は書き起こす。せいぜい身体のしくみについての知識をもち，専門的な医学の基礎になっている健康にかんする原則を知る以外にない。主婦は医者の役割を引き受けるべきではなく，まわりに誰も頼る者がいない時点での緊急の判断を下せるだけの，一般的な基本原理を身につけるべきなのである。

こう述べたうえでこの章は，細胞が増殖されるしくみ，食物と空気と水を摂取してなされる血液のはたらき，神経系統のなりたち，脳の構造と運動，などの説明に，記述のほとんどをあてている。つまり，章の表題は健康管理となっているが，内容は次章以降のより具体的な各論への序として置かれた章である。

第8章，身体の鍛錬（pp.91-94）

家事をしっかり果たそうという女性にたいして，動作の主要な組織である筋肉の構造と筋肉が神経ひいては脳の働きとどうつながっているかを説明する特別の理由がある，というのがこの章の書き出しである。筋肉の運動は脳と神経に従う。脳の神経組織と脊髄が身体それぞれの場所の筋肉を動かし皮膚の知覚を引き起こす。したがって身体の鍛錬には，筋肉だけでなく神経も，それも筋肉の運動を伝える神経と感情や知覚にかかわる神経との両方をも鍛えなければならない。これらのバランスのとれた訓練が必要なのだ。だからたとえば，ただ身体を鍛える目的で長い距離を歩き，脳や神経と無関係にある筋肉だけを対象にするより，スポーツを楽しむとか，土地を耕して果物や花を育てるとかしたほうが，バランス効果はずっと高くなる。それはまた言い換えれば，ただ鍛錬目的で歩くよりも，家の中の仕事をこなしながらよく身体を鍛える仕方があるということだ。家事の責任を十分に果たして家族や他人を幸せにする，それに喜びをもって労働することがいちばん自分の健康につながるということを，著者はとくに若い女性に向けて強調するのである。

第9章，健康な食べ物（pp.95-107）

人の病気や死亡の原因の最も大きな一つは食生活の不摂生にあり，その意味で主婦の役割と

25）本書第36章「暖房と換気」の結び部分でその確信が述べられている（op. cit., p.316）。そこで著者は，ストーブ製造業界の激しい新製品開発競争があって，公衆が不断にそれを押し付けられ劣等な製品に信じられないほどのカネを払うことを強制されているとする。自分が第5章で推奨したストーブの場合，優れた主要特許が長年にわたって保持され，他方で新しい長所をどんどん付け加えてきているものなのだという。このストーブについてもっと詳細を知りたい方は，著者（キャサリン・ビーチャー）までご一報されたいと書き，そこに自分の住所を記している。かなりの熱の入れようである。

責任は決定的に大きい。この章はまず栄養素(いわゆる5大栄養素のうちビタミンは20世紀に発見されるので，ここでは炭水化物，脂肪，蛋白質，ミネラルの4要素）の話から始まり，食材を適切に選択する原理，胃を始めとする消化器官やその機能へと，解説が進む。選択された食材をバランスよく，そして家族全員一律でなく，子ども・若者・老人，男と女など個体の必要に応じて摂取することが求められる。その知識をふまえて家族にとってどのような食習慣が望まれるかにかんする次のような提言は，しごくまっとうなことばかりといってよいだろう。すなわち，食べ過ぎない，胃の健康な働きのために食事時間の間隔をしっかりとる，子どもにケーキやキャンデーの間食をあまりさせない，食欲と栄養のために料理にヴァライティをもたせる，肉食を少なくし穀物や野菜の割合をもっと高める，消化と胃の活動のためによく噛みゆっくりと食べる，熱すぎたり冷たすぎる料理を提供しない，といったことである。

第10章，健康な飲み物（pp.108-115）

刺激性のある飲み物にかんして主婦が家族をどうやってコントロールするかという問題以上に，主婦の科学的知識と道徳の力を求められるテーマはない，というのがこの章の書き出しである。そこで何と言っても糾弾の対象になるのがアルコール飲料で，アルコールにかんする擁護論(そうした刺激を求めるのは人間の本性だ，適度にやれば他の人生の喜びと同列の喜びを味わえるといった）に根拠がないことを示したあと，アルコールが身体に多面的に有害な作用を及ぼすことを，多数の医者の証言を通して明らかにする。[26] 飲料ではないが，タバコとアヘンなどの麻薬も酒と同列の評価である。その上で，家庭での健康な飲み物とは何かを，著者は科学と社会通念とキリスト教との3面から判定しようという。まずいかなる意味においても問題なく身体によいのが純粋な水である。そして果物ジュース，ミルク，ココア，チョコレートも，刺激物を含まず栄養があるという意味でプラス効果だけをもつ飲み物として肯定される。キリスト教が社会への無私の奉仕と弱者への思いやりをきわだった特質としている，その特質を家族成員に当てはめたとき，紅茶やコーヒーを子ども，若い奉公人，さらには主婦自身が摂取するのには問題がある。紅茶やコーヒーはとくに子どもにとって壮健な身体を育てるのに有害であるし，主婦にとっては（誰もチェックする者がいないので)癖になり飲みすぎになりやすい。食べ物の中で刺激性をもった調味料などは身体の組織への栄養供給を促進するが，飲み物の中の刺激性はただ組織を刺激し組織の活動を早めるだけで栄養促進には役立たない。これらがこの章の論旨である。

第11章，身体の清潔（pp.116-121）

この章で「科学的原理」解説の対象になっているのは人体における皮膚と自律神経系が内分泌や代謝に与えている影響のことである。そこから派生する家事の実践は何より入浴の問題となるわけであるが，キャサリン・ビーチャーの時代にはまだ熱気浴，蒸気浴，浴槽式，シャワーなどのどれもが家庭内で支配的でもなく標準化もされていなかったことを知らなければならない。当時はまた，冷水を身体に浴びせる水治療法の効用がひろく説かれたが，これにも大方の医者の合意があるというのではなかった。本書第2章の住宅レイアウトでは2階寝室に浴室(bath-room)が付随しているが，そのための仕切りはなく場所も定かでない。本書全体を通じて浴室や入浴にかんする記述はきわめて少ない。この第11章では，皮膚を清潔に保つことが諸々の病気を防ぐ必要事項であることを説いた

26) ただしこの証言の引用に先立ち，「不幸にして，アルコールの服用にかんしては医者の間にもこれまで意見の不一致がある」(p.110)とも断っている。かのリービッヒがアルコールは砂糖と同じく肺のなかで燃やされて身体を温める作用をなすと言っている，しかし近年の科学が明らかにしているところでは…と，以後，アルコール有害論のほうばかりを列挙するのである。なお19世紀アメリカにおける禁酒運動の性格の吟味や展開の軌跡については，わが国で岡本勝『アメリカ禁酒運動の軌跡』(1995年)と，常松洋『ヴィクトリアン・アメリカの社会と政治』(2006年)の第8章「崇高なる実験」が詳しい。ビーチャーが本書を刊行した1869年は，アメリカ禁酒党の結成年でもあった。

あと，世間には全身入浴ができるような浴槽が身体の清潔を保つのに必要だとする考えもあるが事実はそうではない，毎朝濡れたタオルで身体を拭き肌をきれいな空気にさらすだけで健康には十分だと述べている。[27] ただ乳幼児には皮膚からでる汚物を拭うため全身を洗ってやる必要があるが，その場合，冷水がよいかぬるま湯がよいかは，その子どもの好き好き（皮膚の反応）にあわせてやるのがよいとしている。

第12章，衣服（pp.122-128）

この章での主たる対象は身辺を飾りたくなる年頃の女の子である。健康でも美しくもない服装に魅かれる女の子を説得するのはひじょうに困難な母親の義務である，とするところから話は始まる。その説得のためには，まず骨格のしくみを知らせ，必要以上のウェストの圧迫やきついドレスがいかに身体の発達に有害か，また気力の衰えや疲れ，心臓の動悸，消化力の減退などとさえかかわることを教えなければならない。著者は適切な女の子向けジャケットのモデルを図示しているが，そこではコルセットの利点を謳っているのが，今日との大きな違いであろう。もっと小さな子の服装については，皮膚を強めるために行き過ぎにならない程度の薄着，肌を新鮮な空気や日光に触れさせるような衣服，等が説かれている。

第13章，上手な調理（pp.129-145）

アメリカほど豊富な食材に恵まれた国は世界にあまりない。ところが現実にアメリカの家庭で供される食事は，イギリス，フランスなどに較べてずっと劣っているというのが，この章の書き出しである。素材としてパン，バター，肉，野菜，紅茶とコーヒー，デザートの菓子6部門に分けて，それぞれ購入，保存，調理の段階にいかなる問題があるかを論ずる。最後のデザートだけ，「これらすべての種類（の菓子類）を完璧に作る技術について，アメリカの女性はふつうの料理の技術よりはるかによく理解している」と皮肉っている。アメリカの料理本にあるレシピはほとんどがもともとイギリスを起源とするが，われわれの先祖はこの地独特の気候風土ときびしい労働に合わせて，たとえば辛さや甘さを強調するものに変えてきた。そして今，「わが国の料理本にあるレシピの半分は，この地で育つわれわれの体質や胃袋をダメにするだけのものである。われわれはこのことを吟味する必要がある。そしてこの国の気候や条件のもとでいかに生きるかを考えなければならない。そうすることで，われわれは外国料理のきざな見かけを非難するだけでなく，多くの外国料理本からも摂取することができるだろう。」というのが結びである。

第14章，早起き（pp.146-150）

イギリスを筆頭に貴族制が支配的な社会では，早寝早起きが下層労働階級のものであって，夜遅くまで悦楽に耽り日中に眠るのが上層の証となっている。そしてその価値観が海を越えて，民主制のここアメリカにも多くの人々に影響を及ぼしている。こう述べて著者は，健全な家族にとっての早起き習慣がいかに大切かを，4点の論拠をもって説く。第1に，早起きは家族成員の健康の必須の要件である。身体の健康にとって新鮮な空気と日光を浴びての生活に如くものはない。第2に，夜中にガスライトを灯し石炭を焚き続ける不経済。第3に，子どもの躾をふくめて家族全員の生活の規律にかんすること。第4に，そのような規律は家族を越えてコミュニティの性格にまで及ぶ。少数の夜型家庭を含むようなコミュニティでは，集会，地域の子どもの教育などに，地域をあげて参加することができないからである。

第15章，家庭内の礼儀作法（pp.151-161）

ニューイングランドに入植したわれわれの先祖は，きびしい気候風土と生活条件の中で，誰にも頼らなくて済む自力を身につけることに最大の精力を注ぎ，そのぶん他人にたいする親切や思いやりを態度で表現する面で遅れをとっ

27）本書より少し早い時期の話であるが，上掲M.ハリソン『台所の文化史』に次のような記述がある。「多くの人々は相変わらず入浴は危険なものと考えており，11月から3月までのあいだにきものを脱げば，たちの悪い悪寒にかかると信じていた。1840年代，ペンシルバニアでは，その間に入浴することを違法とするこころみもあった。1840年アメリカ人は浴槽のことを〝共和国の素朴さを堕落させようと企てたイギリスからの快楽主義の道具〟と非難した。」（邦訳207頁）

た。そのことが彼らの子孫であるアメリカ人の深刻な欠陥となっている。それを克服する必要がことさらにある。もう一つ別の面からの要因として，アメリカではすべての人間が生まれながらにして平等だと教えることから，子が親に，年少者が年長者に，生徒が教師に，雇われる者が雇主に，市民が首長に，示さなければならない礼や従順の意味が，ともすれば軽視される。こうしたことがこの章の問題提起となっている。

その問題提起に次いで，家庭内で子どもに小さいときからそうした礼儀作法（成員間の優先権，親切心やホスピタリティ，諸動作の躾け，テーブルマナー等々）を身につけさせる両親の責任が強調されるのであるが，ここでは，その中でとくに女性（妻，母）にかんして述べられている次の諸点に留意しておきたい。まず，民主主義のルールは強く若く健康な者より虚弱で繊細な者に優先権を与える原理の上に構成されるべきだと述べたくだりに特に注記を付し，「力において男に劣る女（feebler sex, of more vigorous man）」にかんして「わが国に広く行き渡っている女性に優先権を与える気風は，外国人によっても，また何事によらず男のやることを女の手に移しその代わり女を男と同じように扱わせようとする一部の人々によっても，きびしいコメントをあびせられている。しかしわれわれはこの気風をアメリカ文化のすばらしさの証とすることを望んでいるし，キリスト教の精神はこれを後退させるよりむしろ増強させるものである」と書いている（p.154）。次いで，家庭内の夫と妻の関係にかんして，自然と宗教は男に家長としての統御権を与えるものであるが，その統御権には自己犠牲的な愛（self-sacrificing love）が含まれている，夫は妻を讃え（honor）自分を愛するように妻を愛し，自分と同じだけの希望と幸福を妻に配慮しなければならない，それだけでなく夫は「キリストが教会を愛した」仕方で，すなわち妻の心痛を思いやり必要ならば妻の向上に力をかす仕方で愛さなければならないと，説いている。さらに続けて，結婚せず，あるいは自らの財産や生活力があって男に依存しなくてよい女性は，孤児を引き取り，他人を雇って訓練をほどこすような仕方で家族状態を作ることができ，その場合の彼女は，家長となる男と同じ権威と権限を持つのが当然であるとする。第1章の論旨と重なるが，もしすべての女性が訓練によって自力で生活できる力をつければ，女は従属者として家庭に入ることを宿命づけられるものでない，そこでは法による従属を必要としない愛による従順だけが残るであろう，ということになる。

第16章，家事はいつも機嫌よく（pp.162-166）

いつもニコニコし穏やかな声で話し家族の太陽のように振舞う主婦がいる家庭には，常に幸福感が満ちている。家事全般に熟達している多くの主婦が，ただ一つ，不平を持ちいらいらし声を荒立てることによって，家庭の幸せを台無しにしている。そもそも家事をシステム化し家計の無駄を省くことを追求すれば，さまざまの障害に出会うのはむしろふつうなのである。どんな仕事でもそうした障害に出会わないものはないが，とりわけ家事はおそろしく多様で非関連的な細々した仕事の集まりであるだけに，常に溌剌とこなすのは尋常の課題でない。主婦はまず，自分が大変に困難で重要な責任を背負っていることを自覚すべきである。それをこなすのには訓練と世代から世代への引継ぎが必要である。頻繁に計画をたて，システム化，経済性の配慮などをしなければならない。[28] こうしたことから，課題は次章に進む。

---

28) Susan Strasser, *Never Done*, は，ビーチャーの所論をとりあげている箇所（op. cit., pp.192-194）でこの第16章へのコメントにかなりの紙幅を割いている。ストラッサーによれば，女性が家事という自己の領域で確固たる地位を占めるための適切なトレーニングをしなかった場合，日常の家事は不満が凝縮する苦難の場になるとビーチャーが考えていたことが，この章を設けさせた。ビーチャーはここで，家事のシステム化という彼女にとってほんらいの課題を背後に押しやり「従順」（submission）と「自己暗示」（self-delusion）を前面に引き出すことによって事態の解決を説く。「従順」にかんして，クリスチャンの法は女が男に従うべきことを教えている。肉体の力と責任の重さにおいて勝る男に従順であることは神に従順であるのと同じで，それは愛情が男女間を結びつけるということと矛盾するものでない。妻の従順は彼女の良い

第17章，システム化と規律の習慣（pp. 167-175）

この章で留意したいのは次の点である。アメリカの家事指南書ではやがて，リリアン・ギルブレスやクリスティーン・フレデリックに代表される，家事の効率性の徹底的な追求がきわだってアメリカ的な特徴と見られるようになるが，それに先立つ19世紀段階にそうした面からの提言がどんなレベルと内容をもっていたかという問題がある。本書の著者の場合，すでに第2章で扱われた住宅の間取りやとくに台所のレイアウトに，家事効率性への強い関心が窺われたのであったが，この第17章もそれとの関連性が十分に予期されるテーマである。そう予期して本章を読むと，第2章がギルブレスやフレデリックの時間＝動作研究にもつなげ得るような示唆があったのとかなり違って，むしろ他の重点に記述の多くがあてられている感じが強い。その要点が，以下のようなことである。

第1に，主婦が行うおびただしい種類の事々を計画化するのに，クリスチャンの家庭にふさわしい（時間とカネと関心の）優先順位が必要である。最初に考慮されるべきは家族の道徳と宗教性にかかわる観点であり，そして同じく他者を喜ばせ向上させるのに心をこめる姿勢である。次いで，単にその場かぎりの楽しみや味覚を充たすためでなく，家族の知的・社会的関心を高めることを優先しなければならない。またどんな義務を果たす場合でも健康は何より大事なのだから，病気などの緊急事態にさいして家事の計画が乱れるのを厭うべきでないし，主婦が自分の健康を損ねてまで宗教や家事の義務を果たそうとするのは，けっして神の喜ぶところではない。第2に，家事を場当たり的に行うのでなく1週間のきちんとした区分けが必要である（それ以上に，1日の中の仕事配分を厳格に組織化しようといったことには，無理が伴うことが少なくないという）。たとえば月曜に1週間全体の仕事配分の準備（特別料理の計画，買物，洗濯をする衣料品の仕分け，修繕等），火曜に洗濯，水曜にアイロンかけ，木曜にアイロンかけを完了し衣料品の仕分け収納，金曜に部屋の掃除，土曜にすべての家具や道具や食器や衣類を棚や引出しや食品庫土等に戻して整頓する，といったことである。第3に，材料や道具を所定の場所にきちんと配置，整理しておく。たとえば洗濯場には桶，バケツ，柄杓，石鹸皿，糊，染料，干し紐，干しピン等々が，同じく裁縫をする場所には然るべきものが，いつも揃えられていなければならない。また仕事の必要に合わせて材料を小口に買うよりは一定量をまとめ買いするほうがずっと経済的であり，それだけに屋内での整理が重要である。第4に，家族の成員が違う場所で使うといった口実で，高価な家具や品物を重複して配置したり，実用性より見かけ本位で家具を揃える愚を排さなければならない。第5に，家事にたいして家族成員の全員が規則的に役割分担をする必要がある。とくに男の子と女の子それぞれに家事を体験させることは，その時点での家事の規律にとどまらず子どもが成長して家庭を持ったときにどれほど役立つかしれない。第6に，家事のシステム化をあまりに厳格かつ一挙にやろうとしないほうがよい。家事マニュアルでシステム化の勧めを読んで実践しようとした挙句，失望と苦痛を味わった末にもとの状態に逆戻りするような女性が稀でない。最初はほんの3つか4つを選んで始めて，習慣を少しずつ増やしていくのがよいだろう。

機嫌を保持する要因として，家事のルールを構成している。もうひとつの「自己暗示」とは，ビーチャーは主婦たちがじつは家事労働そのものによってけっして幸福でないことを知っており，それを心の持ちようで，幸福感に転化できるとしているのである。ビーチャーが本書に続き1873年に出版した *Miss Beecher's Housekeeper and Healthkeeper* ではそのことをもっと強く押し出している。「落ち込んでいる主婦への励まし」という章が設けられ，「あなたはほんとうにたいへんな試練に――哀れみや同情を受けるに足る試練に――直面しています。…励ましの次の言葉は，あなたはあなたのすべての義務をやりおおせる，しかもよくできるのだという保証です。以下が，それをやりとげる方法です。第1にまず，あなたができる事以外，あるいはあなたが最善をつくしてできる以上のもっとよいやり方でやるのは，あなたの義務ではないというふうに，自分の気持ちをお決めなさい。」といった論が展開される。

最後にとくに若い女性に向けて著者は，本を読む，散歩する，他人を訪問する，勉強する，家事を容易にこなすといった習慣を身につけることによって，システム化と規律そのものが楽しみになり豊かな生活につながるのだということを，強調している。

第18章，慈善(charity)を施す(pp.176-184)

恵まれない人への思いやりと慈善の実行にさいして，どのような気持ちで，どんな人（優先順位づけを含めて）に，家計の中からのどれだけを割いて施すのが「一般的な原理」であるか，といったことが論ぜられる。一言でいえば，自分の生活を破壊するほどの無理をせず，しかしともすれば過大になりがちな衣食住の経費をできるだけおさえて，そしてあくまで自らの意思で施すべきものとされる。記述の中の，とくに女性の行動に関連することとして，次の2点だけ取り出しておこう。一つに，女性がいかに慈善心に富んでいたところで,「親や夫の意思で縛られることなく，自分で裁量できる収入がいかに少ないことか」という現実がある。それに対しては，私たちは自分の力の及ばないことをする義務はない，自分がやるべきことを今はできない場合でもそれを目標とすべきである，誠心誠意の取組みをやって始めて自分は何ができるかがわかるものだ，といったことが説かれている。もう一つは，私たちが個々に持ち寄る額がわずかであるだけ，「慈善の経済性」ということを考えなければならない，そのための共同化(associated charities)，組織化されたシステム(organized system of charity)が必要だと。慈善の行為は女性の生きる喜びであり，あらゆる家事の最高位におかれるべき活動だという教えは，第1章から最終章までを貫く基調をなすものである。

第19章，時間と出費の経済性(pp.185-190)

表題からするとこの章は，家事に費やす時間と出費をいかに経済的に処理するかという話題と見られそうであるが，じつは内容は前章の続きであり，クリスチャンの家庭にとって真に神の意思に沿った時間とカネの使い方は何かを論ずるのである。とくにこの世で富や社会的地位や才能に恵まれている女性が，時間と財産を自分の利益や目的のためでなく恵まれない他人のために用いている幾多の例が挙げられ賞賛されている。

第20章，心の健康（pp.191-196）

肉体と精神の緊密な結びつきからして，身体の健康には心の健康が不可欠である。心が不健康になるというのは，新鮮な空気を脳に送ることが阻害されるような物理的な要因，頭の使いすぎや度の過ぎた熱中のような知的な要因，逆に知性や感性を常に鍛錬することをしないための道徳の発育の遅れなどから生ずる。とくに成長期の子どもにたいして，両親と教師はこの3面からの注意深い観察と指導をする必要がある。

第21章，乳児の世話（pp.197-204）

ある医学者の言によれば，出生して2年以内に死ぬ赤ん坊の半分近くは世話の仕方の間違いからだ，と著者は，医者の証言を多々引用しながら，赤ん坊の泣き声を聞き分けなければならない，薬を投与するさいの危険性，適切な母乳やミルクの与え方，新鮮な空気と皮膚の清潔の必要，温かくかつ暑すぎない衣服の種類，戸外での散歩や適度の運動の効用，添い寝の害，歯が生えるに伴う対応，発熱や便秘や下痢への対処，等々を説く。

だがこの章で最も興味深いのは，冒頭に「本章のトピックは，子孫の扱いにかんするハーバート・スペンサーからの引用をもって始めるのが有益であろう」として，2頁近くをスペンサーの著述の引用で埋めていることである。ダーウィンの進化論（自然淘汰論）を含め物理学・生物学等の新発見を社会の進化にも当てはめて認識の総合的統一をはかろうとするスペンサーの思想が明確に世に現われるのは1860年（『総合哲学』第1巻の発刊）以降だが，それから19世紀末にかけてのアメリカで，このスペンサーの社会進化思想ほど「進歩思想家」たちを満足させ，かつ大衆への影響力を発揮した社会理論はなかったといわれる。そのアメリカでスペンサー理論に最も早くから着眼した一人が，キャサリン・ビーチャーの弟ヘンリーであった。彼は1866年，スペンサーに宛てて「アメリカ社会の特殊状況は，あなたの著作をヨーロッパよ

りもはるかに有効で活気あるものにしています」と書き送っている。彼は晩年まで，アメリカを代表するスペンサーの信奉者，紹介者だった。この思想が最ももてはやされるのは1870年代から90年代にかけてであるが，一族の結束が強かったビーチャー家で，キャサリンが1860年代早くもスペンサーを相当に読み込んでいただろうことは，想像に難くない。本章はスペンサーからの直接の引用をもってその一端を窺わせるが（引用されているのは，人間の進化が生れ落ちた時点から始まりそれが次世代に受け継がれていくくだりである），1869年に刊行された本書の記述全体の基調ともいうべき，自然科学（医学，物理学，生物学…）の最先端の発見や成果を家事に適用しようとする方法の背後に，スペンサーの影響があったことは十分に考えられる。[29)]

第22章，子どもの躾け（pp.205-213）

まず児童の身体の健全な成長が環境によってどれほど変わるかの例として，ある孤児施設での改革――内容は，毎日全身を洗う（それまでは3週間に1度），篩にかけない粉のパンから精白粉のパンへの切り替え，食肉の追放，衣服とベッドと新鮮な空気，体育の重視等――によって，死亡・疾病率が劇的に低下し，併せて知的な活動性が増したことを述べる。すなわち子どもの愚鈍やいらいらが，しばしばその子の不適切な食事や身体トレーニングの不足からくることを，親は知らなくてはならない。次いで道徳面での成長の課題として，従順，自制心，慈善精神を育む術が述べられる。そうした躾けを，両親は知恵と忍耐と自制を駆使して行わなければならない。場当たり的な統御や厳しすぎる管理はいけない。そのために求められる具体的な方策として，1，規則の増加や絶対的な命令事項をできるだけ避ける，2，罰則よりも褒美を用いる，3，きびしい叱責調の物言いをしない，4，子どものハッピーな精神状態を損ねない，などが求められる。[30)]

第23章，家庭の娯楽と社会的義務（pp.

29）アメリカにおけるスペンサー思想の，社会と知識人への絶大な影響についてはRichard Hofstadter, *Social Darwinism in American Thought*, 1944.（後藤昭次訳『アメリカの社会進化思想』研究社，1973年）第2章におけるすぐれた分析がある。ヘンリー・ビーチャーの手紙文もそこから引用した。スペンサー哲学は，イギリス産業主義の産物にふさわしくエネルギー保存と進化の理論――自然科学への信頼――を宇宙進歩観の根底に据え，それを動物の進化の説明にあて，さらには最高等動物の人間とその社会の進歩にも当てはめようとする。すなわち動物の生命活動は本質的に進化を含んでおり，そして下等な原生動物の生命が一貫性のない同質的なものであるのにたいして，高等動物に進むにつれて異質性を強め個体ごとに個々別々の存在になっていく。この同質性から異質性への発展が，人間の精神の成長と社会の進歩をも規定する。しかし個別の異質性の進展は無限に続くことができないから，その行き着く先として個々の人間は死を迎え，個々の社会は一つの安定と調和の状態に達する。その先の更なる展開の論理として，スペンサーは人間の後天的資質の遺伝（生まれたあとの精神と肉体の進化が，次世代に遺伝していく）を説くラマルクの理論を支持した。人間進化の一つの到達段階である文明社会で，愚鈍，悪徳，怠慢などのゆえに適合できない者にはいわゆる社会淘汰の力が働く――スペンサーはマルサスの自然淘汰説に同意していた――のであるが，しかし社会がそうした不適者をただ見捨てるのでなく誰かが博愛主義の観点から救済してやることは，その善行者の人格を高めることを通じて人類と社会の進歩に貢献する。このようにして，人間の身体・精神と社会の進歩が並行して進む。アメリカで鉄鋼王カーネギーが熱烈なスペンサー信奉者になったことに象徴されるように，スペンサー理論はアメリカで社会における競争と淘汰を法則化して擁護する役割を担ったが，同時にビーチャーのような社会改良運動家――法制の改革や国家の政策に多くを求めない，また性急な社会改革でなく長い時間をかけ，宗教と科学の力を借りて個々の人間の進歩を通して社会を変えていくという考え――にも，強い支えとなった。まさにこの両方の意味で，スペンサー思想は19世紀末のアメリカで他国にない影響力を発揮したというべきであろう。

30）キャサリンは本書に先立つ1864年に子どもへの宗教教育を主題にした書物 *The Religious Training of Children in the School, the Family, and the Church* を出版している。私は直接それを読んでいないが，スクラーの記述から興味深い特徴が窺われるので，ここに記しておく。スクラーによれば，キャサリンは少なくとも1860年代の始めころまでに，プロテスタント諸宗派の内部でEpiscopal Church（米国聖公会）に「改宗」していたという。それはプロテスタントの中で

214-224)

心身の健全な成長のためにリクリエーションは必要不可欠であるが，娯楽（amusement）の目的はあくまで心身の成長にあるので，そのことから，好ましくない種類の娯楽が抽出される。たとえば苛立ちや不必要な苦痛を感ずる娯楽や，単に遊びで動物を殺す狩りや魚釣りは避けるべきである。これは子どもにも悪い影響を与える。規則的な生活や義務遂行に有害な娯楽もだめ。またあまりに興奮しがちだ，誘惑に結びつきやすい，個人と社会両方の趨勢に益しない，といった娯楽も好ましくない。この尺度からすると，競馬，サーカス見物，劇場通い，ギャンブル性のあるゲーム，ダンスなどには，全面的に悪いものばかりでないにしても，かなり問題が含まれている。たとえば昔のダンスは空気のきれいな戸外で和気藹々行われ，日が暮れたら止めるという具合に，まことに健康的なものだった。今日では空気の悪い屋内で窮屈なコスチュームで身を固め夜遅くまでやるようなダンスが少なくない。このように今日，ほんとうに内容が家族の娯楽・気晴らしにふさわしいかどうかを，個別に判断する必要がある。たとえば家族で行うカード遊びにも長所と短所があるし，小説を読むのもその内容が問われる。家庭で音楽を楽しむのもよいが，女の子に見境なしにピアノを習わせようというのは賛成できない。その点で著者がほぼ無条件で推奨するのはとくに女の子が母親といっしょに花や果物を育てたり裁縫の手ほどきを受けて人形の衣服を作るような楽しみ方，男の子が父親と森にでかけて材料を手に入れ道具を使って工作するような楽しみ方である。

この章の主題が「社会的義務」という表現を加えているのは一見して理解しがたいが，内容は次のようなことである。近年，わが国では社会的義務と家庭内の義務というテーマにかんして，ひじょうに大きな変化が求められている。というのは，多くの誠実な男たちが，仕事があまりに忙しく，遅く疲れて帰宅して何の楽しみの時間も持てないでいる。子どもにも注意が行き届かない。もしそうしたことが金儲けや大きな家を建てるために生じているのなら，子どもにとって父親がいかなる意味でいちばん大切なのかを考えなければならない。しかし世の中には公衆の利益や福祉に奉仕して自分の時間が持てない両親もいないわけでない。そのような両親は，彼らの最初の社会的義務が，自分の子どもを社会に役立つ成員に育てて送り出すことではないのかどうかと，問う必要があろう。公共の問題にかまけて自分の子どもの精神と道徳の練磨をないがしろにした男には，やがて社会からの糾弾が浴びせられる大いなる危険がある，著者はこういうのである。

「社会的義務」に関連しては，次の点も加えられている。異邦人（stranger）にたいするホスピタリティと親切は神が最も望むところである。この義務を果たす任務が，移動性に富み人々の境遇が変わりやすいアメリカ社会でことさらに大きい。コミュニティの外から入り込んできた者を暖かく迎え彼にアトホームな気持ちを持た

米国聖公会だけが子どもをまともに扱う宗派だとキャサリンが思うようになったことと，深くかかわる。カルヴィン主義の伝統をひく他のプロテスタントは，子どもはもともと原罪を背負い邪悪な本性をもって生を受けるので，その後の霊的再生による目覚めを通して始めて救われると説いてきた。その再生は通常，成人となってようやく実現するので，個々人の身体的な成長と精神的な成長との合致をそこに見るのである。そのような人間の成長観は19世紀を通じて次第に後退し，これと逆の，むしろ子どもはもともと無垢な状態で誕生するのに成長にともなって現世の環境によって毒されるのだという理解が押し出され，両者の見解がせめぎあう状態が続くことになる。キャサリンの1864年の著述は明白に後者の立場をとったうえで，その無垢を汚染する諸々の危険がある現実を描き，それを自己犠牲と苦難を通じて解決すべきことを説いたというのである。彼女は同時に，現実の世の中で無垢を回復することは無知をもってしてはきわめて困難だと認識しており，したがって子どもの教育とか躾けが，（生まれついての邪悪を除去するためでなく）生まれながらの無垢な本性を回復するために不可欠だと説く。子どもは，自身の欲望や情熱のセルフ・コントロールを教えられなければならず，世界のさまざまな誘惑に自己犠牲をもって打ち克つことを――われわれはそれが好きだから行うのではなく，それがわれわれに課された仕事であるから行うのだということを――教えられなければならない，と。（K. K. Sklar, op. cit., pp.260-261.）

せることができれば，これこそ「もてなしの楽しみ」（hospitable entertainment）の最高の達成というべきである。

第24章，年寄りの世話（pp.225-227）

働けなくなった年寄りは，とくにそれまで他の人々のために活動的に生きてきた人ほど，これからの生活に希望を持てない。目や耳がかすみ，身体が弱まり，最後に気力も知力も衰えてくると，死んだほうがましだと思う老人が少なくない。キリスト者の弱者にたいする無私の奉仕は，そのような老人をかかえる家庭の中でこそ鍛えられる。家族成員とくに若者は，そのことが家庭に与えられた恩寵だと思うべきである。そうした老人の存在や老人の語ることが，家族全員にとってどれほど大切かを知らしめなければならない。できるだけ若者と一緒にゲームやスポーツをする機会を作る。自分で文字が読めなくなった老人には大声で読んでやる。近所や社会のできごとを話して伝える。それらにかんする老人の意見に耳を傾ける。庭の手入れでも食事の支度でも，老人ができることを手伝ってもらって刺激を与えるのが，老化の進行を防ぐ最もよい手段である。多くの家族が，これまで同居していなかった親族の老人を迎え入れることになる。それは貧しく家もない人々かもしれない。そのような機会こそ，救い主がなされたことを行う時だと知るべきである。

第25章，女中・奉公人との関係（pp.228-246）

章の英文原題は The Care of Servants である。内容からして Servant は事実上，他家に短期の女中に入った未婚の女性であり，Care とは主に，家事に疎くその家のしきたりにも馴染んでいない他所の娘とどういう関係を結び彼女を使いこなすだけでなく一人前に成長させるかという課題である。本章が，本書全38章の中の最も長い章であるということがまず興味深い。この問題へのアプローチには，単に女中の扱い指南ということを越えてアメリカの家庭運営にかんする考え方の特徴が大いに反映しており，それゆえの長さだといえよう。[31]

「今日のアメリカは，自分で自分の仕事をしながら〝レディ〟と呼ばれる女性の階級が存在する唯一の国である」と，この章は書き出される。それはアメリカ固有の，普遍的な平等のドクトリンから生みだされた。ニューイングランドでは植民地時代から，イギリスで「サーヴァント」と呼ばれる人々の階級がなくて，そのような仕事をする人々は「ヘルプ」とか「ヘルパー」とか呼ばれた。このヘルパーとは，たとえば男の子ばかりいるブラウン家と女の子ばかりいるジョーンズ家から，それぞれ互いに男の子と女の子を貸し出すようなかたちで生まれたものである。どんな家庭でも女の子たちは，掃除，洗濯，調理，紡織や裁縫，園芸といった家事を仕込まれて育った。その家事をやりながら本を読む時間を作りだして，知的にも成長した女性がたくさんいる。したがって，知的な教養を身につけて育った女性はみな，家事をいかに能率的に，労働節約的に果たすかを心がけていたのであって，「仕事は昼までにお済まし」という

31）本章注1に挙げた，イギリスの家事指南書を代表する「ビートン夫人もの」とアメリカにおけるビーチャーの書物との内容の違いの中で，奉公人にかんする記述の違いは最も大きな部分である。イギリスの場合，奉公人とは料理人，上働きと下働きの女中，子守り・乳母・看護婦，従僕，下男，御者・馬丁，ボーイ等々と種類が多彩であり，種別に奉公人を調達する市場が確立しており，奉公する年数も長く，1家庭内の人数も多い。ビートン夫人ものではそれが当然視されており，私が所持する2000年復刻版では Domestic Servant の章がじつに85頁を占め，章がさらに男の召使，女の召使に，さらにたとえば女の召使も上述のような各種に分けられて課題と任務が説かれている。これはビーチャーに限らずアメリカの書物との本質的な違いである。この点については，前掲の M. ハリソン『台所の文化史』邦訳192-202，および河村・今井編『イギリス近現代女性史研究入門』42頁をも参照。

ついでながら，河村・今井編著がこの奉公人の部分と並んで，ビートン夫人もので記述の大きな部分をなすこととして紹介している（そしてビーチャーの著書にはまったく書かれていない）のは，主婦の「社交活動」である。イギリス中産階級夫人の午後の仕事には，他家への訪問やパーティへの出席といった社交が，重要な比重を占めていた。これはアメリカでの地域社会の一員としての行動と違って，むしろコネ社会関係の中での家族のコネクションを維持する意味合いが強く，夫の社会活動を補完するものだったと，上記『入門』では解説されている（同43-44頁）。

ニューイングランドの古い格言はそこから生まれた。幼少時からの訓練と並んで，祖母から母へ母から娘へという体験の伝承もきわめて重視された。「年長者からの言い伝え」がこの分野ほど価値をもったことはない。このようにビーチャーは，女中のやる仕事がアメリカでは，主婦が自ら家事を行うことと本質的に区別されなかった，むしろ地域ぐるみで賢い主婦を育てる機能も持っていたと，女中制度を肯定的に評価するところから説き起こすのである。

だが時代とともに状況はいちじるしく変化し，家事のトレーニングをほとんど受けないまま結婚する女性が増え，その後の彼女たちを圧迫するようになった。手足も筋肉も虚弱できつい家事労働に耐えられない若い妻が少なくない。家事がいくら困難だからといって，それを回避するわけにいかないから，まことに貧しい内容の仕事ぶりで行うしかなく，結果として家事を2倍に困難にしている。それをカバーするために女中を雇って賃金を払う，あるいは今はやりのジムに通って体育教師にお金を払うといったことでは，とても経済的とはいえないだろう。

主婦が家事に女中を迎え入れるとき，主婦の第1の仕事（ビジネス）は，一人の教師としての仕事にほかならない。その職能は実際的な知識とそれを人に伝えるセンスによって成果が決まる。主婦としての十分な技能を身につけていない者が他者を指導しようとしても，尊敬を得ることも感銘を与えることもできない。パンを焼くこと一つ取り上げても，一見単純な過程のなか何十もの技術がこめられていて，それをクリアして始めて良いパンが焼けるのである。常に良い女中がわれわれのところにやってくるわけでない。彼女は忍耐と訓練をつうじて良い女中に「作り」あげられるべき素材である。彼女が良い気質とそれなりの器用さを持っていて，そして主婦が自分の専門性を身につけていれば，経験の乏しいごく平凡な娘が良い女中に生まれかわるのだ。

女性が行うもっと高度の活動分野について，近年まことに多くが論じられるようになったが，そのことから無意識に，家庭の中で女性が果たす役割を低くみなす風潮がひろがっている。とくにWoman's Right Conventionsのような女性団体が，女性の関心を台所と育児に限ることへの批判を展開することによって，そうした風潮を助長している。だがこの団体はほんらい，女性を身体だけ使い家の中の些細な仕事をする存在だとみなす古くからの不条理に抵抗して結成されたのであって，そんな運動に参加している女性がすぐれた能力を生かし家事を見事にこなしている例はたくさんある。女性の活動分野はたしかに広がってきている。すべての女性は性を越えて人間としての権利を有するのであって，弁舌家，天文学者，歌手等々の才能を持つ女性がその才を発揮するのに，女性であることが障害となってはならない。だがそうしたことを認めてなお，上のような女性団体の言説の中に，家事を低くみなし女性の家事教育に反対するものが多いことには，不同意を表明せざるをえない。今日の公立学校の教育から，かつては毎日相当の時間をかけて教えていた裁縫がなくなって，労働者や職人の娘がかわりに代数，幾何，三角法などを叩き込まれている。少女たちは家事にかまけていては，学校の授業についていけない。本だけ読んで実践を疎かにし，頭だけ使って身体を鍛えないために，虚弱で疲れやすく気力もない少女たちが増えており，そんな少女たちはやがて結婚して家事運営に大きな非効率をきたすことになる。かくして家事労働は，今日のアメリカにおける大問題なのである。

アメリカは自由と平等の原理の上に成り立っている社会であるのに，家事にかんしては封建時代（さらにアメリカにおいては奴隷制）の名残が今なお広く機能している。家事について英語で書かれた世界中の文献に，主人が特別の階級に属し奉公人は下位の階級に属する，したがって良い奉公人とは自らを卑しみ主人を畏敬するよう子どものときから叩き込まれた者だという，古い封建制の観念と言葉が充満している。そうした名残を持たない劇作，詩，小説，史書は無いといって過言でなく，その影響が，アメリカ人の多くの雇主の思考と態度に及んでいる。そのことから，いかなる環境に生を受けた

かにかかわりなく家事サービスへの拒絶現象がアメリカにひろがった。とくにニューイングランドで，賃金が多少高い場合でも息子や娘は他家への奉仕に行くのをいやがり，あちこちにできてきた工場での，家事よりずっと単調な仕事のために家を離れた。それに代わって女中といえばアイルランド人やドイツからの移民がイメージされるような状態になってきた。

近隣の若者が他家を手伝う家族間交流があった時代には，奉仕する側とされる側は対等だということで，同じ食卓につき同じ居間でくつろぐ習慣が守られていた。違うテーブルで食事をさせるとか居間の椅子にかけさせないのは，大いなる侮辱とみなされた。だが旧世界の移民からなる奉公人の場合，奉公人じたいが同じテーブルで食事をするのを嫌がる。だからといって彼らはご主人様の意に服従するという母国の伝統を守り抜くのではなく，アメリカに住んで多かれ少なかれ身につけた自分流の自由と平等の観念をもとに，テーブルや居間の共有とは別の面で自分の好みや主張を持ち出すようになっている。

こうしてアメリカは，旧世界の国々より家事への奉仕に思いやりの意識が少ない国となり，アメリカの家事奉公人問題には今日，この国特有のやっかいな性格が伴っているというのが著者の認識である。それにたいする対応策はそう簡単に標準化できるものでないが，著者がおおよそ提示しているのは次のような点である。[32]

まず雇主は奉公人にたいする内心の蔑視を払拭し，一つの人格として十分な尊敬をもって遇し，そのことを奉公人に実感させなければならない。雇主と奉公人との関係を――大工と顧客の関係と同じく――ビジネスの契約なのだと割り切るべきで（したがって同じ食卓につく必要はなく），個人的な親しさを根拠にして相手の上に立とうとしてはならない。女中がダンスや夜遊びにほうけるとか，わが家のルールを守らないといった場合どうするかについて，いちばんよいのは最初の契約時にそのことを契約条項としてはっきりさせておくことである。日常の仕事で過ちを犯した場合，その都度指摘してただすのはあまり上策でなく，前もって警告しておくとか，それでも気づかずに犯した過ちは怒らないでさりげなくもう一度やらせるといった配慮が望まれる。何事によらず雇主には寛容と忍耐がきわめて必要である。そして良い部屋や食事や高い給料を与えるといった面だけでなく，自分が向上しているという実感，やがて自分が優れた主婦になれるという自信をもたせてやるのが重要である，等々。

奉公人の管理は，それが１人，２人を相手にする場合に最もよく運営できる。３人となるとギクシャクが始まり，５人，６人ではうんと難しい。何事によらずアメリカの家庭にはコンパクトとシンプルの追求が望まれるのである。かつてニューイングランドでは，石鹸と蠟燭をそれぞれの家庭で作っていたのが，今では店で買うのが一般的になっている。フランスではパン

32）本章のこのくだりにかんしては，キャロル・ラサによる――私の読み方とはニュアンスが異なる――次のような解説がある（Carol Lasser, The Domestic Balance of Power: Relations Between Mistressand Maid in Nineteenth-Century New England, in Nancy F. Cott ed., *Domestic Ideology and Domestic Work*, part 1, 1992, pp.125-126.）「…だが雇主と道学者は特に，アイルランド人の女中が自分の必要を主張し自分の目的に沿った契約をしようとすることに悩まされた。彼らは…近年の移民が市場制度の契約主義を含めて共和制というものの恩恵をまだ理解も享受もしていないことを糾弾した。キャサリン・ビーチャーが嘆いたように…（以下，ビーチャーからの引用が続く）。しかしビーチャーはだからといって家事の古い徒弟修業の観念に時計を巻き戻すことができないと理解していた。かくしてビーチャーは，女中が享受している過剰の権利と彼女が見たものに対抗する術として，雇主にたいして契約の自由という最も有利な手段を用いるよう，助言したのである。…（再びビーチャーからの引用）。このように，女中たちが労働力の売買を通じて自分の経済的権利を打ち立てようと闘ったことが，明らかにビーチャーや彼女の読者を脅かした。そしてビーチャーが雇主たちのために与えた答えは，…移民が理解する能力のない互恵主義や責務という観念を放棄せよということだった。彼女は主婦たちのために，幾分かの漠然たるエモーショナルな満足とともに，それ以上に重要なこととして，家事における関係のなかで真の権力を回復するよう求めたのである。」

はパン屋で買い洗濯は洗濯屋にだすのが普通だ。われわれにはまだまだ家事を簡素化し軽減する方途が残されている。(本稿の注21に引用した，近所共同の洗濯場ができ洗濯の労苦が軽減されればどんなに良いだろうという文章は，これに続いて書かれていることである。)[33] 旧世界で16人の奉公人を要した家事を，今日のアメリカでは3人の奉公人で十分に達成できる。だがそのためには奉公人を指揮する主婦じしんが，家事全般に広い知識と技能をもち，刻々成長する社会に合わせて家事の問題を解決し，奉公人に教育をほどこして奉公人の自覚を促し高める主婦でなければならない。

第26章，病人の看護（pp.247-255）

家族の誰かが寒気や腹痛を訴えたときに主婦がなすべき適切な対応や判断の話から始まって，病人をかかえた家庭での病気と病状に応じた要件がさまざまな側面から語られている。子どもたちに，病人にどう接するかとか病人を見舞うときの態度などを教えるのは，教育の重要な機会であるといったことが，述べられている。

第27章，応急手当と解毒法（pp.256-259）

切り傷，打撲，捻挫，火傷，さまざまな毒物を呑み込んだ場合，稲妻，火災等々への緊急の対処等の話である。

第28章，裁縫，裁断，繕い（pp.260-264）

すべての女性は娘時代に，縫製のさまざまな技法――止め縫い，へり縫い，伏せ縫い，返し縫い，鎖縫い，ボタンかがり，ひだ付け，ちどり掛け…と――を習得していなければならない。作業に入る前のきちんとした準備が，時間とできばえを左右する。とくに「ワーク・バスケット」の整理・整頓が大切である。無駄をださないための型紙の使用法，布地ごとや縫う対象物ごとの注意事項などが述べられる。

第29章，熱と灯り（pp.265-269）

第5章の暖房にかんするテーマでは，熱効率の原理から始まって適切なストーブを推奨するまでが説かれたが，この章では，暖房関連では薪の選び方，石炭の選び方，次いで灯り関連では目の健康と経済性との両面から，ガス，ランプ(獣油，綿実油，テレビン油，鯨油，石炭油，石油）の選び方，ランプそのものの選び方と掃除の仕方，最後に蠟燭の作り方，等が内容である。[34]

33）注21にギーディオンから引用したように，たしかにビーチャーはここで共同の洗濯場と書いているのであるが，ストラッサーの読み方はギーディオンと違う。この文に至る前段でビーチャーは，石鹸や蠟燭をもはや家内で作らなくて済むようになり，フランスではパン焼きや洗濯も業者まかせにしていると記述していることからしても，彼女は協働による家事労働の軽減に期待するのでなく，家事労働から生産が排除されつつある趨勢に目をとめているのだと。ビーチャーはコミュニティでの家事の協同を唱えるユートピア共産主義を公然と批判してきた人であって，彼女の主眼は，あくまで家事を既婚女性個々人の領域として保持しながら，工業化の進展によってその一部を雇用労働によって実行する（あるいは商品の購入によって充たす）可能性を展望したのだという（Strasser, op. cit., p.194)。ストラッサーによれば，家事の専門性を高めることによって主婦の誇りを取り戻すというビーチャーの使命感からいって，洗濯だけはどこまでいっても誇りの回復につながるものでない。ビーチャーはアメリカの家庭はできるだけ奉公人の雇用をやめて主婦が自ら家事をこなすことを提唱したが，しかし洗濯労働がなくならない限り中産階級の主婦はけっして女中を雇うことをやめないと信じていた(ibid., p.112)。この点私も，ギーディオンよりストラッサーの説き方が的確だと思う。『家事大革命』を書いたドロレス・ハイデンはストラッサーが書いたこの部分を引用するとともに，さらに次のようにいう。「この〝協働〟という構想は，個々の女性を私的な家庭における強い存在として描くビーチャーとストウの努力を削ぐものといえようが，同時に家庭での洗濯仕事の労苦――水汲み，湯沸し，煮沸，洗い落とし，リンス，乾燥，火あぶりアイロンでのアイロンかけ――が，ビーチャーの自己犠牲的な奉仕の概念をもってしても，それを超える労働であることを示唆している。」またここでビーチャーが洗濯についてだけ共同作業に言及したのには，本書の前年(1868年)，妹のストウがニューイングランドの〝モデル・ヴィレッジ〟を描いたさいに，そこに文化ホール，図書館等とともにタウン洗濯場というものを構想し，主婦たちがそこに行って熟達したオペレーターに代金を払って洗濯してもらう…と記した，その発想を受け入れてのことであろうと，ハイデンは述べている(D. Hayden, op. cit., p.60)。

34）この時点でビーチャーはまだ，石油(1854年に発見され急速にランプ燃料として広がりつつあった）でなくよく精製された鯨油を，最も明るくかつ炎が白いの

第30章，快適な部屋づくり（pp.270-277）

第2章で解説された住宅の望ましい間取りに続いて，各部屋を維持する作法である。居間については，絵画，カーテン，椅子やソファー，ニスを塗った家具，暖炉と炉辺等の洗い方や清掃，染みの取り方など，そして常時使わないパーラーなどは1週間1度程度の掃除でよく，その間埃を防ぐためにどうすればよいか等が提示される。次いで寝室については，換気とベッド・メーキングのコツ等である。

台所関連の記述には，この章でもいちばんの重点が置かれている。[35] まずキッチンの清潔。壁をしばしば洗い，床はできればオイルクロスで覆う。シンクには毎日熱湯をかけるほか，ときどき灰汁で洗う。シンクの上に常時3枚の布巾を掛け，1枚は油のついた皿を，1枚は油のついたポットや鍋を，1枚は油のつかない食器を拭く，というふうに使い分ける。週に1度，それらを洗濯する。シンクの下に汚水桶，棚には石鹸皿，水桶を常備する。調理ストーブには常に湯沸しを置き水を充たしておく。ストーブ用の火かき棒やふいごも必需品である。皿洗いにも，4つの「ルール」── 1，こびりついたものをきれいに取り去る，2，熱い石鹸水の中で洗い，すすぎ湯に入れる，3，油のついた皿はさらに念入りに湯洗いする。ナイフやフォークは柄を水につけないで洗った上でナイフ皿に入れて磨く，4，別にきれいな石鹸水の桶で鍋類を洗う。布巾を洗ってかける。汚水桶を空にして熱湯をかける。金属のティーポットや鍋を火の前で乾かす。最後に火の回りを整頓し台所をきれいにする ── を提示している。キッチンで用いる陶器，鉄鍋，ブリキ製品，木製品，バスケット類等の適切な使い分けが勧められる。煮炊きの時間を計るのに時計は欠かせない。キッチンそのものに続いては，食料庫，貯蔵庫の保全と，それに必要な用具などである。最後が屋内における蝿，蚊，蚤，蟻，鼠等々の防御や駆除が論じられる。

第31章，庭と菜園の手入れ（pp.278-281），第32章，園芸植物の増やし方（pp.282-285），第33章，果樹の栽培（pp.286-288）

第31章は，土質の改良，温床の作り方，花の種蒔き，野菜の種蒔き，移植，室内での鉢植えの手入れ，等が話題である。第32章では，植物に種類によって異なる増殖方法があることを解説し，取り木，接ぎ木，剪定の方法などにも論及する。第33章，さまざまな果樹を育てることが家族に豊富な果物を提供するのと，子どもの教育に役立つのとの両面からいかに価値あるかが説かれ，土地の条件に合った果樹の選び方，植え方，育て方，害虫や病気を防ぐ方法等に及ぶ。

第34章，動物の飼育（pp.289-295）

ここで動物というとき，それは猫や犬を始めとするペットであると同時に，馬，牛，羊，家禽などの有用物でもある。ペットについては，とくにそれが子どもの成長に役立つという面から高い評価が下される。他の動物についてはその飼いかた ── 畜舎の清潔，飼料，採光，運動，寄生虫の除去等 ── が叙述の中心である。最後に筆致ががらりと変わって，「今日の〝女性問題〟の最も深刻な部分に，寡婦あるいは結婚しない女性が被るさまざまな苦難をどう救済するかということがある」という記述が登場する。その救済策には女性が自ら働いて収入を得る仕方も含まれるが，今日ではまだ，家事の仕事に長けた女性が持ち味を発揮して収入をえる道にあまり関心が向けられていない。と書いた上で，直接体験をしている農家出身の女性はもとより多くの女性にとって，動物の飼育は男性に劣らずにこなせる有望な職業の一つだというのである。中でもふつうの女性の筋力，財力，適応力などからして，養蜂が，興味と収益を両立させ

でランプには最適だとしている。ランプの使用にかんして，経済的な理由から火勢をしぼり灯りに目を近づけて本を読むのは目によくない，ベッドで本を読むのは火災の危険があってよくないと，戒めている。また蠟燭については，多くの家庭が廃油の活用法としてなお自家生産していることを記しつつも，市場での価格が急速に安くなっている状況からしても，買って使ったほうが主婦労働の軽減になるという考えに傾いていたようである。

35）本書のこの箇所を，以下に書くよりずっと詳しく，前掲 M. ハリソン『台所の文化史』邦訳 230-232 頁が紹介している。

うる有望分野であると推奨されている。

第35章，腰掛式土かけ便器（pp.296-307）

この便器の解説に12頁もの紙幅をあてているところに，ビーチャーがかなりこれに入れ込んでいたこと，そしてまたこれが一般家庭にあまりよく知られていなかったことが，窺える。19世紀後半から世紀末にかけて，中産階級の家庭には屋外便所（と，屋内での〝おまる〟の使用）に代って水洗便所の導入が徐々に進んだが，配管コスト，頻繁なトラブル，水管の漏れ・破裂・修繕代……といった悪循環が，どの家でも悩みの種だった。イギリスで発明されアメリカに導入された，水洗ならぬ土洗式の便器が一時期有望視され，1876年の建国100年万博（フィラデルフィア）にも出品されている。1869年に公刊された本書での記述は，内容からしてもかなり先駆的なものだったろう。土かけ便器というのは，今日の水洗と似た腰掛式の背中部分にじょうご形の箱を据えて中に乾いた土を入れ，排便が終わって立ち上がると自動的に人糞の上に土がまかれるしくみになっている。それが下の容器にある程度たまったところで内容物を戸外で数週間乾かすと，また以前と変わらぬ乾燥土の様相と機能を回復する。こうして5，6回繰り返して使うと，その土はトン当たり何十ドルもするペルー産グアノ（鳥糞）と同じくらい効果のある肥料になっている。ビーチャーによれば，中国や日本と違ってアメリカ合衆国は，人間の排出物を土に返さないでただ垂れ流しあるいは海に流し込んで，社会全体として貴重な肥料分を無駄にしてきた。土かけ便器の各家庭への導入は水洗式のようなトラブルもなく，労力もそれほどでなく，長い目で見れば経済的にも優れているというのである。

しかし周知のようにこの便器は，たいした普及の時期もなく廃れていく。この方式の最大の難点は，とくに都市部において乾いた土のコンスタントな入手ができなかったところにあった。ビーチャーは，各家庭のストーブからでる灰を「土2：灰1」の割で混ぜることも可能だとか，土の調達は石炭と同じ程度には容易なはずだなどとも書いているが，どうもそのようには進行しないまま，水洗便所に圧倒されたようである。

第36章，暖房と換気（pp.308-317）

本章は，暖房にかんしては第5章に続く章である。換気については，第3章，第4章がそれを主題にしていたほか，健康管理，衣服，乳幼児の世話等々，各章で家族の健康にかんする話題がでると必ずといってよいくらいきれいな空気を摂取する必要に言及がなされており，著者がこれに並々ならぬ関心を寄せていたことが窺える。この第36章でも，暖炉あるいはストーブが部屋を暖めるのにどんな特性や欠陥をもつか，それと空気の汚染・換気との関連，および経済的視点からの優劣が論じられている。第2章に提示されたモデルハウスがその点をどう解決しているかも，各階ごとに述べられる。

第37章，ホームレス，ヘルプレス，不品行の人々に向けてできること（pp.318-332）第38章，クリスチャンにとっての隣人（pp.333-339）

第1章「クリスチャンの家庭」から説き始められた本書の全体系は，体系にふさわしくこの第37,38章をもって締めくくられる。第1章で，クリスチャンの自己犠牲，無私の献身の徳義の上に築かれる家庭の概念が「孤児，病人，ホームレス，罪人たちを神の恩寵のもとに迎え入れる」場にまでひろげられた，その意味での家庭の中味が，最後二つの章で説かれるのである。これはクリスチャンの家庭のいわば究極の目的であり，それだけに最も困難な家事労働でもある。自称クリスチャンを含む富んだ階級が貧しい人々を自分が住む地区に入れることを拒んだ結果どの都市にもスラムが形成されつつある近年の趨勢，貧民用の大規模施設を作ってそこに一括収容しようという近年の都市政策，あるいは少年が早くから外に出て1日8時間，10時間と働き楽しみも勉強の時間もない，少女は台所か店で終日働いて女性としての心を磨く機会もないような生活環境からは，恵まれない人々が身体的，社会的，道徳的に成長する見込みは得られない。一方の階級が自分のために他人を働かせる特権を持つと意識するよう教えこまれ，他方の階級が自己を向上させる何の手段も持ち得ないふうに育つ現代社会の現実を，キリストの名において糾弾するビーチャーの姿勢と情熱

が，終章に漲っている。

もしクリスチャンの家庭の大いなる目的が弱い者，病める者，罪ある者への無私の愛と奉仕を鍛え身につけることだとするなら，近くに幼い子ども，働けなくなった老人，病人，犯罪者などがいない場所でどうしてその訓練をなしうるだろうか。なぜ孤児や老人がこの世に生を保っているかといえば，それは人々の愛と奉仕の対象になるべきものとしてである。にもかかわらず今日，いかにわずかの子どもしか，孤児や老人や病人にたいして行うべきことの訓練を受けていないか。こうしたことを縷々述べて著者は，家庭じしんの向上のためにも恵まれない人々を収容所から連れ出し自分の生活の周辺に受け入れるべきことを説くのである。

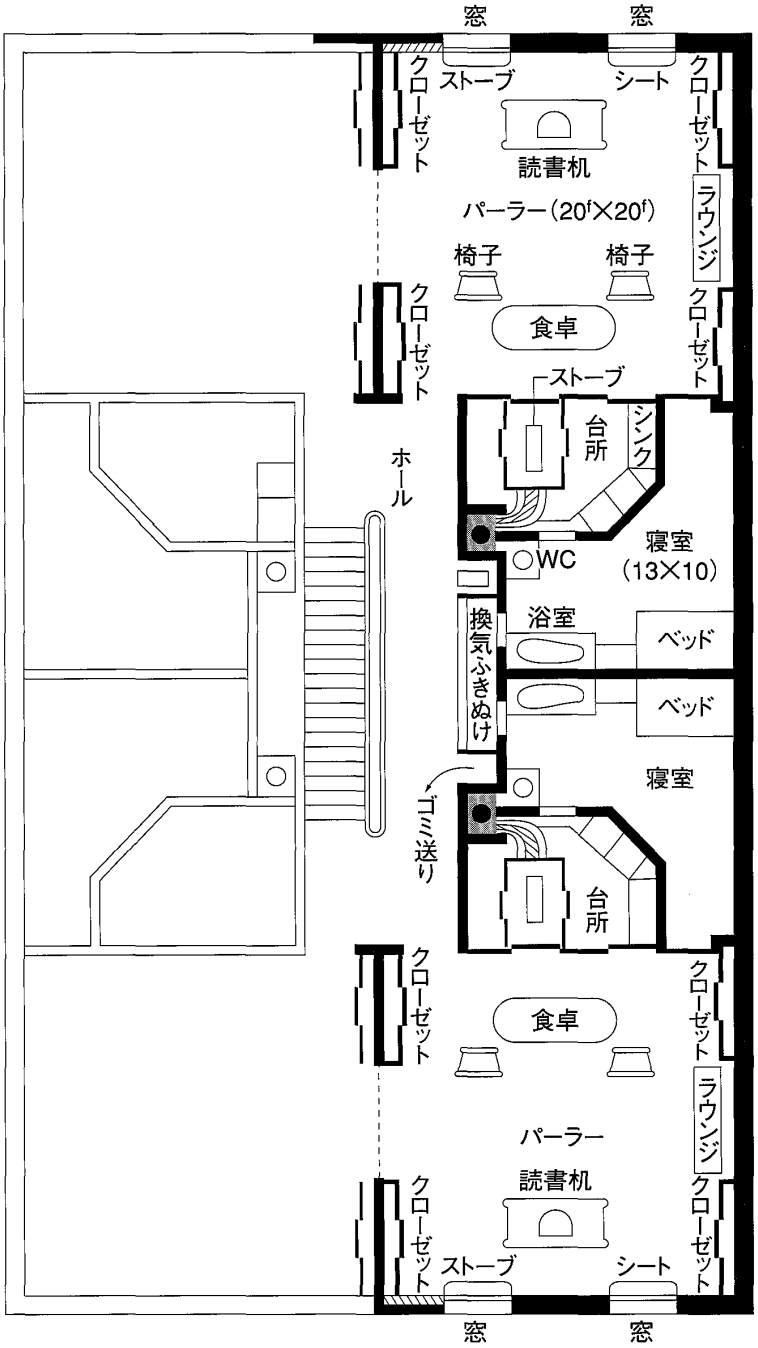
これまで本書でクリスチャンの家庭にふさわしい住宅として著者が述べてきたモデルは，第2章と，さらにその後の章における園芸や動物の飼育まで含めて，19世紀中ごろの人口分布の実態を反映して農村部の環境を前提としたものだった。しかし第37章の主題となっている「恵まれない人々」は，圧倒的に19世紀後半に急増しつつある都市部の住民である。彼らが都市の中で一般の労働者家庭と混ざり合い，平等の扱いを受けるような住宅と住宅環境を新しく設計し提示しなければならない。という課題をふまえて，著者はこの章で，これまで述べてきた住宅モデルの考えをできるだけ引き継ぎながら，都市部に建設さるべき共同住宅のモデルを提言している。それが第5図である。

第5図は4階建て共同住宅の中の一つのフロアである。1フロア当たり4つの家族が住むように設計されているから，この共同住宅は最大限16家族が入居できる。しかしこれは4人家族向けの設計であって，家族成員がもっと多い場合は点線で仕切られた隣の領域までを1家族が占め，その場合は台所が一つ取り払われることによって10人家族までが住めることになっている。したがって最少では8家族の共同住宅となる。間取りや家具等の配置と設備とは，家事労働と時間との節約および健康のための暖房と換気を重点にして設計されている。台所のストーブは第4章で推奨されたもの，暖房用としては地下にある大ストーブからの熱がパイプを通って各階に配給されるセントラル・ヒーティングが主で，厳寒期だけ各部屋の窓際のストーブを稼動させる。パーラーの壁際にあるクローゼットはスライド式のドアになっていて，開けると内部にフックや棚や引出し等がある。パーラーにあるラウンジ（長椅子）の場所は2段式のベッドを置くこともでき，その上にかかっているカーテンをおろして着替えをする。したがって夫婦と子ども二人の家庭では，夫婦が寝室で休み子どもはパーラーで寝ることになるだろう。寝室の壁には衣類掛けと，天井近くに広く作りつけの棚と引出しがあって多くの収納ができる。台所内部の構造は前に第1図で説明したものと，基本的に変わらない。そして台所のスライド式ドアを開けると調理場からほんの数歩の場所に食卓テーブルがある。またこの共同住宅には水洗便所と長さ4フィート以下の浴槽がついている。浴槽は深さ半分のところに蓋をして洗面器やピッチャーにも使用できる。…

当然ながら，第2章のモデルとこの共同住宅とでは，前者が入居者自身の資金と理念をもって住宅を設計するのにたいして，後者は入居者と違う誰かによる資金と理念が求められるという決定的な違いがある。その後者の誰かこそ，本書における真のクリスチャンである。「自分の子どものために金を蓄えるような指示や承認を，われわれはどこからも受け取っていない。人はおのれの家族に食べさせ教育を授けるための準備をするように教えられるが，家族のために金を貯めろとはけっして勧められない。…すべては〝世界を守る〟ために支出すべきでものある。そのことのためにわれわれは額に汗し，安楽や富を犠牲にする。そして子どもたちをそのような自己犠牲的な労働をなすよう訓練するのである。」

そして本書のタイトルからしても，実践者として最も期待されるのが中産階級の女性である。プロテスタントの女性たちが富と時間と労働と良心を持ち寄って上のような施設を作り運営することは，どのような意味をもつだろうか。富める人々の中には，そのような行為はできないとか，ほかに多くの無私の善行があるとか，

第5図　都市共同住宅の間取り



富を失うことで自分たちの文化や教養が衰退するとかいった，さまざまな口実がある。ローマカトリック教会では，そのような慈善を行う女性は自分の義務を越えることをなしたと判定され，それは彼女たちが過去に犯した罪を償うのと，より劣った罪びとへの赦しを買い取るのに蓄えられるのだと教えられる。しかしプロテスタントには，信仰と慈善心に富む女性をそういうかたちでひきつけるような教会があるのではない。恵まれない人々には，平穏な家庭と誇りの持てる仕事が提供される。洗練と大望を身につけた人々には名誉と高い信用の社会関係が提供される。罪を犯した人々には過去の罪の赦しと新たな恩寵が提供される。そして教義と義務をめぐる議論に迷う信仰深い人々には，何が真実であり義務であるか，何が聖書の正しい解釈であるかを決する絶対の聖職者が提供される。その内容はローマカトリック教会の教えの中の

暗黙の信条である魂の救済と同じ〝faith〟に帰結する。[36)]

同時にこの間，家族の紐帯をもたないで高度の教育を身につけた女性が，全国に散らばる女性たちの組織化に取り組んでいる。もともとプロテスタントの教会では，女性は結婚すべきものと教え，結婚しない女性にたいして主婦が得るのと同じような誇りや栄光の場を与えてこなかった。一方ローマカトリック教会では，未婚の女性が慈善の奉仕を行ったときに最も高く賞賛され，彼女の教育と能力にふさわしい場所として女子修道院が建設された。しかし今日のプロテスタントの家庭観では，独身の女性がまさにクリスチャンの家庭を作り高める働きによって讃えられるようになっているのだと，ビーチャーはいう。そして主としてその内容が，第38章に展開されていると読みとれる。「クリスチャンにとっての隣人」(The Christian Neighborhood)とは，クリスチャン同士でなくキリスト教に教化されていない人々との付き合いのことである。かつてニューイングランド植民地に住む人々は，その意義をしっかりと自覚し実践していた。しかし時代とともに，キリストを知らない人々への取組みは一握りの自己犠牲的な奉仕者にまかされて，多くのクリスチャンにとっての隣人は隣に住むクリスチャンの家庭でしかなくなった。この章での著者の提言は，そのような状況を打ち破る教会の建設と運営である。

その教会の外観は，ここには載せないが原書第1章の扉にスケッチされている。3本の大木が建物を覆い，後景にも家が見当たらないような農村風景である。しかも茂っている樹木はアメリカ南部のもので，教化の対象として黒人が念頭におかれていることが窺える。第38章には建物内部の図面が示されているが，それは教会であると同時に学校であり，かつまた家族が住める住居でもある。1階には大部屋（25×35フィート）と台所があり，大部屋は日曜に礼拝堂になるほか，それ以外の日は学校と居住者の居間に（移動式仕切りで自在に）分けられる。台所は食堂を兼ねるとともに，学校の授業で家政を教える場でもある。2階は大きい二つの寝室からなる。相変わらず随所にたっぷりしたクローゼット等の収納施設があり，また建物全体の換気に配慮が行き届いている。この建物に二人の独身女性が孤児，病弱者，老人などと同居して家族を構成しており，そこに近所の子どもたちが毎日通って読み，書き，計算と，家族成員としての義務や態度を学ぶ。また子どもたちは花や野菜や果樹の育て方，蜜蜂の飼いかた，その他アウトドア作業の訓練を受け，それは施設の収入につながるし，子どもたちへの職業教育としても役立つ。[37)]

上にも述べたように，このようなセツルメントは何より奴隷解放後の南部を念頭においていると考えられるが，著者は本文中でこれは開拓が進む西部，中国人と日本人が押し寄せる太平洋岸にも適用できるとしている。一方，ニューイングランドや北東中部の古い州では，クリスチャンの女性の前にある状況はまったく別のものである。そこには不健康な工場，オフィス，商店が充満している。あるいは見捨てられている者を神のもとに連れてくることとはまったく関係のないレジャーを享受しながら人々は生き

36）キャサリンの社会理論の基礎ともいうべき「無私」(self-denial)がカトリックとプロテスタントとでは違うのだということを，彼女は1840年代から強調していた。カトリックでは「主として自分自身の苦難と損失を免れる目的で，利己的，禁欲的な無私の行為を行う。」それにたいして自分が説く無私は，個人の救済目的でなく人々の社会的なつながりの手段として行われるものである。「すべてが良い」社会の状態は各人の無私を基盤にしてこそ達成される。そのような無私の徳性を最もよく備えたのが女性だというのが，彼女の女性論，家庭論の大前提である。(K. K. Sklar, op. cit., p.172)

37）スクラーのキャサリン伝では，彼女の1841年の著作（*Treatise*）とこの1869年の著作との論調にあまり違いがないと見ており，したがって *The American Woman's Home* 各章の内容にはほとんど立ち入らないのであるが，その中にあってただ一つ，この第38章における「教会」（教会・学校・住居の統合）構想だけ，新しくかつ重要な提言だ――「これはキャサリンの合一された制度的マトリックスの最終的ビジョンだった」――として，中味をやや詳しく紹介している。(K. K. Sklar, op. cit., p.264)

ている。そこで行う慈善活動の内容は自ずから上と違ってくるが，ここで現実に必要なのは何より資金の提供と組織の結成である。

以上，家事労働史の文献をたどる本稿のテーマの中で，キャサリン・ビーチャー（と，ハリエット・ビーチャー・ストウ）の1869年の著作に特別の長い紙幅を与え内容を書き連ねたのは，次の三つの狙いからであった。第1に，19世紀アメリカの家事労働に立ち入った幾多の論稿の中で本書の存在はきわだってよく知られ，引用される頻度もおびただしいが，引用する論者はそれぞれに自分のテーマに引き寄せてビーチャーの所論のある部分だけ取り上げるわけだし（実際，今回読み通してみて，各人の読み取り方がビーチャーの真意とずいぶん違うと感じたことがしばしばだった），またとくにフェミニズム運動からの影響を受けた著述は「男は仕事，女は家庭」シェーマの中でわりに簡単にビーチャーを裁断する傾向があるようにも思われる。私としてはここで，自分の関心からのつまみ食いでなく，一応すべてに目を通して全体を紹介する，それによってとにかくこの時期の家事労働の全範囲をつかみ取る，ということに主眼をおいたのである。ビーチャーが論ずる家事労働の考察範囲や内容は，たしかに白人中産階級の家庭にほぼ限定されるものであろうが，その「限定される」とは他の階級に無関係という意味でなく，いわば当時の家事労働の規範としてあらゆる階級・階層に影響した，だからこそ19世紀を代表する著作となり，後世にまで残ったのであろう。本稿の次章以降，当時のもっと違う階層の家事労働にも目を配る所存であるが，そのさいの比較材料としてもビーチャーの所論を用いたいと思う。

第2に，多くの評者が指摘するように，ビーチャーの書物の眼目が，アメリカ社会が近代化（工業化）に伴って「家族のための労働が不十分にしかなされず，報われることも少なく，卑しく不名誉な仕事と見られ」るようになってきた事態にたいして，家事の面目を回復するところにあったことは疑いえないが，ここで確認しておかなければならないのは，誰が家事を担うかの問題を別として，家事そのものの名誉回復はこの時期に誰かが行わなければならなかったろうということである。近代化（工業化）は家事の社会的評価を低める圧力になったと同時に，家事を新たに能動的に構築する課題の方をも緊切なものに仕向け，家事の担い手に相当の意欲と知識と判断力を求めたからである。ビーチャーはまさにその時代的な要請を正面から受け止めたわけであるが，それだけに彼女による家事労働の重要性の強調は，その内実を上手にこなす手法ということをはるかに越えて，社会問題と切り結ばざるをえなかった。急増する消費財への的確な評価眼，科学的な研究成果の摂取と選択，そして貧困や頽廃や格差にたいする批判と対処，これらがすべて家事労働という範疇のなかで論じられる。言い換えればそれによって建国期に獲得した「社会の徳性は家庭で育まれる」（女が男より劣るのではない）という通念を死守するとともに，その後の女性の社会進出の道づくり，社会的発言の正当化の論拠としたのである。19世紀末以降に顕在化するソーシャル・ワーカー，セツルメント・ワーカー，ウェルフェア・ワーカー等の活動は，その多くが女性だったという点でもアメリカ的な特徴を多くはらんでいるが，それはビーチャーのような取組みを見ないでは説明できないものである。[38]

第3に，これまたアメリカ的な特徴を存分に含む「ホーム・エコノミクス」の源流を見るという関心からビーチャーを取り上げるさいには，一見して枝葉に属するような所論にも目配りをしておく必要があると，私には思われた。本章の注5にとりあえず触れたが，19世紀末までに明確に姿を現わし20世紀初頭に組織と体系をととのえてくるホーム・エコノミクスなる理論の系譜にビーチャーがどうつながっているかは，定説があるわけでないし，軽々しく断定もできない。しかし第2章で提唱されているモ

38）この点にかんする私の考えは，別稿「アメリカ経営史におけるパターナリズム」（北大「経済学研究」第53巻3号，2003年12月）の13-14頁にもう少し詳しく述べている。

デル住宅を始めとして，家事の効率性の徹底的追求こそが女性の真の解放につながるとするアメリカン・ホーム・エコノミクスの発想が全編に内在してことは否定できないだろう。いずれにせよ，19世紀中期のこうした発想の中味を吟味しないまま，20世紀のホーム・エコノミクスの誕生を論じることはできない。